

弘前藩の刑法典 (十) — 寛政律 —

付 『要記秘鑑』三十三 (三・完)

橋本久

目次

はじめに

一 安永律 [第六号]

付1 『御刑罰御定』(安永律) [第十三号]

二 寛政律

(一) 『御刑法書之写』 [第七号]

(二) 『寛政律』(その一) [第八号]

(三) 『寛政律』(その二) [第十二号]

(四) 『寛政律』(その三)

付2 『隠商過料定牒』

付3 『人別方御用取扱條例』『人別調方取扱條例』

[第十三号]

(五) 『寛政律』(その四)

補訂1 『藩法史料集成』所収「弘前藩御刑法牒」

(六) 『寛政律』(その五) [第十四号]

付4 『諸取引御触書』『公義御書付留』『公義御触書留』

付5 (参考) 『公事訴訟取捌』 [第十五号]

(七) 『寛政律』(その六) [第十七号]

付6 『要記秘鑑』三十三 [第十七・十八・二十号]

(八) 『寛政改正御刑法帳』 [第十九号]

(九) 『寛政改正 刑律』 [本 号]

(十) 以下

三 文化律

(九) 『寛政改正 刑律』

凡 例

- 一 弘前市立弘前図書館所蔵本〔G K三三二・五、二七〕を用いた。
- 一 字体、字配りはできる限り、原本に従った。変体がなっていないのは原本に必ずしも従ってはいない。
- 一 原文の行末が次行に及んだ場合は、行末を示すため、「」を加えた。
- 一 原本には見られないが、項目の前など適宜行間を空けた。
- 一 原本の丁数・表裏を各丁表裏の終行末に「」で示した。
- 一 便宜上、(二)~(七)に倣い、各項目に一、二、三……、各条文に仮番号1、2、3……等の数字を付した。ただし条文番号のうち18~21については省く。
- 一 虫損については、□または□で表示した。
- 一 塗抹箇所は左に△を付した。
- 一 他に適宜書き加えた箇所は「」で示した。



(縦24.7cm, 横17.2cm)

寛

此度御刑法〔五項、以下同〕御改被仰付〔ト、イ、シ〕はニ付沙汰仕〔ト、イ、シ〕は尓明律を歴代之刑法を損益致〔ト、イ、シ〕は儀ニ付律□軽重宜く義理共ニ正しく御座〔ト、イ、シ〕は而共一躰之律重く御座〔ト、イ、シ〕は而答罪ニ相當〔ト、イ、シ〕は部著大方當時戸メニ而相済〔ト、イ、シ〕は振合ニ御座〔ト、イ、シ〕は而猶又刑法茂違〔ト、イ、シ〕は而其愆ニ而難相用依〔ト、イ、シ〕之當時通例行ひ〔ト、イ、シ〕は刑名を以明律の格〔ト、イ、シ〕は隨〔ト、イ、シ〕ひ差等相立專其義理〔ト、イ、シ〕は〔ト、イ、シ〕は輕重相分り申〔ト、イ、シ〕は右之内公儀御定〔ト、イ、シ〕は抱り〔ト、イ、シ〕は義并是迄之御法ニ而俄ニ輕重難相成〔ト、イ、シ〕分ハ与得沙汰仕〔ト、イ、シ〕は酌酌加減仕〔ト、イ、シ〕は間此未御刑罰御沙汰御座〔ト、イ、シ〕は節若此度相定〔ト、イ、シ〕はケ

弘前藩の刑法典 (十)

条之内洩連は儀御座ら而も右之趣ヲ以明律を
 考罪之輕重無之様被仰付
 法と明律刑名との相當之差等左の如
 〇御刑
 〔一オ〕

〇戸メ	〇管罪	明律	十
五日			二十
十日			三十
十五日			四十
廿日			五十
三十日	〇鞭刑	〇明律杖刑	六十
			七十
			八十
			九十
			一百
		明律	
		△徒刑	
〇鞭刑追放			
十八 所拂		一年 杖六十	
廿一 三里		一年半 杖七十	
廿四 五里		二年 杖八十	
廿七 七里		二年半 杖九十	

〔一ウ〕

二

鞭刑五

〔一ウ〕

- 一 戸メ五 同十日 同十五日 同廿日 同三十日

但子兄弟或者奉公人之類戸メ難相成者者右日數之通
 過料人夫代日六十文之積を以過料為差出ル事

御刑法御定

定例

御刑法名目

三十	十里大場御擣	三年	杖一百
〇徒刑		明律	△流刑
半年	鞭三十		二千里杖一百
一年	鞭三十		二千五百里杖一百
一年半	鞭三十		三千里 杖一百
〇死刑		明律	△死刑
斬	絞		
獄門	斬秋後		
磔	斬即決		
火刑	火刑ハ火附を極て重科ニ相立ル		
公儀御定ニ付明律相當無之			

料 2 鞭三 同六 同九 同十二 同十五

3 三 鞭刑追放五

資 同十八所拂 同廿一 三里 同廿四 五里 同廿七 七里

同三十 十里大場御構

但追放ハ鞭十八已上ニ得共其罪之子細ニ寄其處ニ難差

置」者者鞭數ニカ_レ己_レ須所拂可致事

4 四 徒刑三

徒半年鞭三十 同一年鞭三十 同一年半鞭三十

但徒刑之者者銅鉛山ニ差遣し鞭刑之上年限之通苦

使可致事

5 五 死刑四

斬 獄門 磔 火刑 〔三才〕

6 六 贖刑

鞭三八 過料 三貫六百元 同六 四貫貳百元

同九ハ 四貫八百文 同十二ハ 五貫四百文

同十五ハ 六貫文 同十八ハ 拾貳貫文

同貳十一ハ 拾五貫文 同廿四ハ 拾八貫文

同貳十七ハ 貳十壹貫文 同三十ハ 廿四貫文

徒半年ハ 三拾貫文 同壹年ハ 三拾貳貫文

同一年半ハ 三十六貫文 死罪ハ 四拾貳貫文

右過料之儀ハ老幼癡疾之類刑ニ不可行者并過ニ而人

を殺し或ハ疵付ハ類相當ハ過料ニ而罪越償_レ可申事

7 一過料之者貧困ニ而上納難相_レ者ハ銅鉛山江差遣し一

日六拾文之贖ヲ以夫役ニ遣_レ可申事若又老幼癡疾之類

夫役_レも難相成_レ者其身牢舎之上一年或者貳年_レて

容赦可致事

七 五逆之事

8 一惡逆

祖父母を打擲いたし或ハ殺さんと謀り并伯叔父姑兄弟

姉母方之祖父母を殺し夫越殺_レ者之事

9 一不道

一家之内死罪_レあらざるもの三人を殺し并人之支骸を

切_レ不_レ登_レ紀_レむよく切害いたし_レもの事

10 大不敬

御宗廟御飾物并御召物_レを盜取_レもの事

11 不孝

祖父母父母之事越訴へ或ハ悪口致し并父母之扱ひ

〔四オ〕

宜しあらば難渋さしむるもの事

12 不義

支配之者頭分之者越殺し弟子として師匠を殺ひ
もの事

八 老幼癡疾之事

13 一歳七拾以上十五歳已下并癡疾之者死罪已下贖ニ而容

赦可致事八十已上十歳已下死罪を犯しひもの

上聞之上時宜ニ御沙汰可被 仰付事盜賊并人

疵付ひ者贖を出さざる可申事其余之罪ハ御構無

之九拾已上七才已下ハ死罪ニ而も刑を不可加ひ事

但罪越犯ひ節未老疾ニ無之共更頭まひ節老

疾を以沙汰可致事

〔四ウ〕

14 一癡疾之事惣而人更〔はつむ〕りまひ片輪病人をいふ也馬鹿乱

心之類も癡疾ニ可致更

九 科人ハ首従を可別事

15 一貳人已上申合罪越犯ひ節ハ其内趣意相企ひ者越首と

ゑしひ事其餘ハ従と致ひ事従の者ハ首り罪一等

を減し可申更尤本文不同類不殘と有之者首従之差別
無之事

一〇 一人ニ而式罪有之更

16 一凡二罪已上共不頭へまひ節ハ重きもの一ケ条越以罪を定

い事若一罪先不頭ま既不刑越加へる後外の罪頭

節ハ輕紀者并同等之科ハ御沙汰ニ不及若既不頭ま

科重ひと沙汰直し不致前罪之鞭數差引殘而鞭數

〔五オ〕

〔はか〕
せあり刑越加ひ事

一一 五軒組合連坐不可及ケ条之事

17 一隠田畑 一隠津出 一盜柚 一博奕之宿 一隠商賣

右ケ条之内罪越犯ひ者組合者本人之罪相當を以過料

不直し組合四軒り差出さまひ事

但組合四軒ニ不滿ものハ四軒之割合を以不足分ハ容赦
致ひ事

一二 科人自身申出ひ者

22 一惣而悪事を致ひ者更未頭已前自身申出ニおゐてハ其罪

御容赦被仰付ひ事

料 23 一竊盜或ハ手段等ニ而人の財物を取其後過越悔ム而自身

と本人江返ル者ハ上江申出る登同前其科可許事

資 一三 親類ハ罪越隠シル而も御容赦之事 [五ウ]

24 一父母兄弟伯叔父姑夫婦之間罪有之相隠ル共御咎無

之事但其事を泄し逃去らしむるとも不可罪事家來

主人の為不隠シル茂是亦同前之事其外妻之父母娘

の聳夫之兄弟^{〔は〕}相隠ル節平人方罪三等越減可申事

一四 親族輕重之事

25 一本文^{〔と〕}祖父母有之ハ高祖曾祖同様之事孫と有之ハ曾

孫玄孫同様之事嫡孫之承祖ハ父母と同様嫡母養母者

実母と同様之事

一五 罪可減者も累減を得□事

26 一譬^{〔は〕}罪越犯ル者首^{〔從と〕}と有之時ハ□從之者ハ罪一等を減

ル上其者外ニ可減子細有之時ハ又幾等も段々減可申事

一六 婦人犯罪事 [六オ]

27 一婦人の罪^{〔を〕}犯ル者鞭十五ニ不可過十五已上ハ相當ル節十五

限」ニ而殘る數ハ過料^{〔を〕}罪^{〔を〕}贖む可申ル事
28 一婦人之鞭刑者襦袢の上より打可申但姦淫之罪ハ衣を
去り直に打可申事竊盜之類ハ入墨を許可申事

一七 不義之財物取捌之事

29 一財物之上ニ而罪を犯ル者本人相手共不罪有之時ハ其財物ハ

没収可致^{〔を〕}若相手方罪あり本人罪無之時ハ其財物

ハ本人江返ル事

30 一其財物之没収可致^{〔を〕}の并本人江可返物既不費用^{〔を〕}ひハ、

可令償出事若科人身死ル而品物費用^{〔を〕}節^{〔取を〕}ハ不及事

一八 同類之内出奔有之片口ニ相成ル者之事

31 一同類之内老人出奔^{〔を〕}一人召捕ル節其者出奔致ル [六ウ]

者^{〔を〕}本人之旨申出別人證文無之時者其者^{〔を〕}ハ從^{〔と〕}ル

處^{〔を〕}し刑を加へ可申事其後出奔致ル者^{〔を〕}召捕^{〔を〕}礼^{〔を〕}明^{〔を〕}ル

處^{〔を〕}し^{〔を〕}節^{〔を〕}最^{〔を〕}初^{〔を〕}之者本人ニ相違無之ハ則首^{〔を〕}と致^{〔を〕}し殘^{〔を〕}る形^{〔を〕}加^{〔を〕}る事

一九 罪科加減之例

32 一加^{〔を〕}と本罪^{〔を〕}の上^{〔を〕}不^{〔を〕}猶^{〔を〕}加^{〔を〕}て重^{〔を〕}致^{〔を〕}ル事減^{〔を〕}と本罪^{〔を〕}の上^{〔を〕}を

猶減して輕致の事但減の節ハ四段之死罪三段之從罪各
一等減減らるし事加の節ハ一段毎一 一等減致の事猶亦
加罪ハ徒一年半鞭三十限ニ而加て死入入逼ららば加て死
に可入者ハ其ケ条ニ其決断有之の事

二〇 關所之事

33 一關所之支鞭三十已上専ら利欲ニ抱りぬ科ハ其利欲之輕
重ニ依田畑者或ハ家屋敷家財等關所可申付事重科 「七オ」
亦ても利欲ニ不抱ものハ律のケ条不出の外ハ關所不可致事

二一 取押物之事

34 一物而禁しぬを犯ぬ者を取押ハ義其懸り合役筋之者ニ無之
ハハ、其品物取押之者へ被下ハ事其役筋ニ而取押ハハ、
押物」多少ニ寄御賞被下其品ハ没納可致事

人命

二二 人竄謀て殺ぬ者

35 一宿意を以謀て人竄殺ぬ者其張本人ハ獄門加談手傳致し
殺ぬ者ハ斬罪加談斗ニ而手傳不致ものハ從一年半鞭三十
36 一疵付ぬ斗ニ而不死時ハ張本人ハ斬罪加談手傳らるし

ハ者ヲ從老年半鞭三十

37 一謀殺之事行むハハ疵付不申共張本人ハ鞭三十加談手
傳之者鞭十五 「七ウ」

38 一右之張本人ハ縦む其場不臨ハ共殺の節ハ其身手ニ懸殺
ハ同然疵付の節ハ手ニ掛疵付ハ同様之事加談之者ハ其場
ニ不臨ハハ其場ニ臨ハ者より罪一等減許可申支

39 一若因之財宝を取ぬ得ハ強盜之律不隨ハ張本人加談之
差別無之不殘礙ニ但同行之内ニ而も財を分不申ハ得ハ
謀殺之律亦て捌ハ事

二三 謀て親を殺ぬもの

40 一謀て親を殺ぬ者男女ニ不限肆し者鋸引婦人夫之
父母越殺ハハ同様之事

鋸引之者ハ罪之次第建札ハハ往來道路ニお
ゐて肆之上三日往來之者勝手次第鋸引為致ハ事 「八オ」
右日限相濟ハまで鋸引致もの無之ハハ、其節引廻
之上礙

41 一殺逆之事既不行むハハ縦疵付申さハ共礙
42 一親殺之者妻子ハ不殘遠追放家屋敷家財關所
但子ニ而も別居之ものハ御容赦之事

43 一親殺之もの放自滅ハ死骸塩漬礫ニ可致事

二四 親族之謀殺

44 一祖父母竄殺んと謀リ已不行ひる者ハ獄門殺しゆへハ引廻之上礫但母方の祖父母同様の事

45 一婦人夫之祖父母并夫竄殺ゆもの右同様の事

46 一伯叔父姑姉の謀殺已ニ行むゆへハ徒老年鞭三十疵付ゆへハ獄門殺ゆ得ハ礫 [八ウ]

47 一祖父母父子孫を謀殺致ゆもの解死人ニ不及徒一年

半鞭三十

48 一伯叔父姑之甥竄姪を謀殺致し兄弟之弟妹を謀殺ゆ

ぬしゆもの斬罪

二五 謀て主人を殺ゆもの

49 一謀て主人を殺ゆもの男女ニ不限肆し者鋸引

但疵付ゆもの行むゆもの惣して子の父母ニ對ル同様の事

50 一下人他の主人を殺ゆもの礫但し人主人ハ暇出外江奉公

致し罷在本の主人竄殺ゆもの他の主人を殺ゆと同様の事

二六 姦不困て夫竄殺ゆもの

51 一妻妾他の人と姦通致し因て夫竄殺ゆもの引廻之上礫

姦夫ハ獄門若男の手段不て女其謀竄不知といへとも女 [九オ]

ハ斬罪又女之手段斗ふて男其謀竄不知時ハ只姦夫之

刑不_レ一等竄加へ罪ニ行むゆ支

52 一妻妾人と姦通致ゆもの罷在姦通之所不於て見届即時

不殺ゆものハ御咎無之事若其場竄立去りハ後訴も無之

擅不殺ゆものハ喧嘩ニ而人を殺ゆと同様の事

二七 一家三人を殺ゆもの

53 一一家之内非罪死人三人を殺し并人の支骸を切_レ不登記む [ほどき]

こく殺害ぬぬしゆもの引廻其上礫家財關所死者之家江被

下ゆ事妻子ハ遠追放加談致ゆもの手傳致ゆもの共獄門

但追放之義別居子ハ御容赦之事

二八 欠

54 一支配之者頭分之者を殺さんと謀り既行むゆへハ徒半年鞭

三十疵付ゆへハ斬罪殺ゆへハ礫 [九ウ]

二九 呪咀毒藥

55 一呪咀調伏等竄以て人を殺さんと謀りゆもの謀殺之律を以

罪不行ひゆ事若唯人を苦くと謀りゆ者二等を減ゆ事
毒薬を用ひゆ茂同様之事毒薬を買未用ゆ者鞭三十
其事事冤冤知て棄棄賣ゆゆもの同罪不知時ハ御咎無之

三〇 打擲打擲て人を殺ゆもの

56 一本巧一本巧て殺ゆ心心不不無無之一時の喧嘩打擲打擲て人を殺ゆ

もの斬罪尤相手の方理不尽致方方不不得止事切害

不不おれてハ相手方親類名主會議之上被殺ゆもの平日不

法者ニ相違無之ゆもの死罪二等死罪二等冤冤減可申事

57 一同く謀て人を打擲致し因て死ニ至りゆハハ急所之疵を

得得ままささゆ者冤解死人不可致事但敢初衷を企ゆもの 「二〇オ」

從一年半鞭三十餘人ハ何何せも鞭十五

三一 怪我怪我て人を殺ゆ者

58 一怪我怪我て人を殺し或ハ疵付ゆもの打擲之律律依依て贖

を取り其者其者ニ下下ささ流流通通記記事事

59 一途申馬車途申馬車て人を過ちゆもの緩急の事無之ゆハ、怪我

を以沙汰可致事若不慎之儀儀於在之ハ打擲之律を以刑

を可加事

60 一危起仕業危起仕業を致し因て人を殺ゆものハ贖贖なる難相成打擲

の律を以刑を可加事

61 一喧嘩等喧嘩等不不因て傍の人を殺し疵付ゆもの喧嘩喧嘩不不て

殺し疵付ゆと可為同前事

62 一若又謀て人を殺さんとして過て別人を殺し疵付

ゆハハ謀殺を以沙汰可致事 「二〇ウ」

三二 夫有罪の妻妾を殺ゆ者

63 一妻妾夫之祖父父母妻妾夫之祖父父母冤打擲等に依り其夫打之因

て死死不不至りゆハハ御咎無之若又強而擅擅殺ゆハ、鞭十五

但外の罪等但外の罪等不不てより打殺ゆハ、可為解死人事

64 一夫妻冤打擲或ハののしり等致ゆしり等致ゆニとり其妻妾

自殺致ゆもの不及沙汰事但重記重記疵ニ為負ゆ節ハ

夫妻妾の打擲の律夫妻妾の打擲の律不不とり沙汰可致事

三三 人を逼て死冤致ゆもの

65 一吏吏不不とりて人を逼り其人自殺人を逼り其人自殺ゆゆもの鞭十五

并金式阿冤出さし并金式阿冤出さしを死物の家江被下ゆ事若行

姦盜冤致ゆ為人を逼り死を致ゆものニ獄門 「二一オ」

三四 人殺之者冤内濟人殺之者冤内濟ゆゆもの

66 一祖父母父母人の為^レ殺^レさ^レ其子孫内済^ルも^レ是又同様

徒老年半鞭三十夫被殺^ルて内済^ルも^レ是又同様

の事伯叔父姑兄姉ハ弑等^ル減^ルし可申事若子孫

人の為^レ殺^レされ祖父母父母内済^ルも^レの鞭九常人

の内済ハ鞭三

67 一内済の為^レ賂^セの取り^ルも^レの錢の高^ル以て竊盜^ル不準^ルし

重記^ル方^テ沙汰^ル可致事但父母殺^レされ賂^セを取^ルも^レの死罪

68 一同居或^ハ同行之人初^メ其人^ヲ謀^ルて害^スんと^スる事^ル冤

乍存^ル止^メさ^レ流^ルも^レの并殺^レされ^ル後不訴^ルも^レのハ鞭十五

打擲

三五 一喧嘩打擲ハ疵の輕重^ニ以て罪を定^ル事 ^{〔二一乙〕}

69 一手足或^ハ外の物を以人を打擲^ル致^ルも^レの戸メ十日疵付^ルも

の戸メ廿日

但打^ル所不破^{トモ}青赤^ニ腫^キも^レ疵^ト定^ル事

70 一血鼻口^トり出^テ或^ハ内損^ル血^ヲ吐^キも^レの鞭九不淨^ルの者^ヲ以^テ人

の頭面を汚^シも^レの右同様^ノ事

71 一齒^ノ老^カ或^ハ手足の指一本^ヲ折^リ一目^ヲ傷^ミ并^ニ耳目^ヲを傷

ゆ^ルも^レの鞭十五湯火^ヲを以^テ人を傷^ルも^レの不淨^ニ以^テ人の口臭

72 之内^ニ入^ル義^ニ同様^ノ事齒^ノ式^ノ杖^ノ指^ノ式^ノ本^ノ折^ルも^レの鞭十八

73 一人の骨^ヲ折^リ并^ニ兩目^ヲ傷^ミ或^ハ婦人の胎^ヲを墮^シ并^ニ一切

刃物^ノ之切^ル疵^ハ鞭廿四但兵器^ノ之^ニ而も柄^ヲを以^テ打^ルも^レ刃物^ヲハ

無^レ之事

74 一手一本足一本^ヲ折^ル或^ハ一目^ヲ潰^シも^レの鞭三十 ^{〔二二オ〕}

75 一兩足を折^ル或^ハ兩目^ヲ潰^シ或^ハ持病^ヲ在^ル之所因^テ之癢疾

不^レ至^ラし^ル者^ハ并^ニ人の陰陽^ヲを傷^ル者徒老年半鞭三十右

料^ノ人之家財半分^ヲ以^テ疵^ヲを得^ル者江被^下ル事

右條々之科人大勢^ニ犯^ル其内疵付^ル者^ハ重罰^ニ致

事本意趣^ニ企^ル者^ハ疵付^ル不^レ申^ルても其次^ノ科^ヲ不^レ申^ル付^ル事

但疵^ヲを得^ルも^レの若死^ス不^レ至^リも^レ同行之内人^ヲを殺^ル節^ヲ不

留^ル之律^ニ依^テ而鞭十五

76 一喧嘩^ニ而双方疵^ヲを得^ル節双方^ノ疵相改^ル疵の輕重^ニ而罪^ヲを

定^ル事尤跡^ヲり手^ヲ寫^シ理直^キ方^ハ二等^ヲ減^ル可^レ申^ル支

三六 一 疵療治之事

77 一疵^ヲを蒙^ルも^レの日限^ヲを立^テ打擲^ル者^トり療治^致さ^シむ

へ起^ル事日限之内^ニ死^ルへハ打擲^ル之者^ヲ可^レ為^ル解^ル死^ル人事若 ^{〔二二ウ〕}

日限之内^ニ不^レても疵平愈^致ル断差^出ル後余病^ヲ不^レて死^ルへ^テ

只打擲^ルの罪^ヲ加^ヘ可^レ申^ル事

78 一指^ヲ老^カ折^ル已上^ノの疵日限之内^ニ療治^ス不^レて平愈^致ルへ^テ

罪二等減可申日限満る日まで平愈無之者ハ右之本

律を相用事尤婦人の破産并病氣平愈^{等しいた}ても痼疾

ホムル^{等しいた}余リハハ罪を減し申間敷事

79 一手足其外のもの^{等しいた}にて軽き打疵廿日限金創火毒ハ三十

日限手足^{等しいた}折骨^{等しいた}余ミ婦人の墮胎五十五日限

三七 勢を以て人を縛り打擲^{等しいた}ルもの事

80 一争論^{等しいた}をとりて人を縛り打擲^{等しいた}ルし或ハ私家^{等しいた}におれて人

を押籠^{等しいた}ホムルもの鞭九若疵重内損し吐血已上ニ至

ルハハ平人打擲^{等しいた}方二等^{二三才}加可申事尤自分手を下し不申と

も「差圖^{二三才}ル^{二三才}余し^{二三才}ルもの本罪不可致事差圖を受手^{二三才}下し^{二三才}ルもの

の」一等^{二三才}減可申事

三八 下人主人を打擲^{等しいた}ルもの事

81 下人として主人を打擲^{等しいた}ルもの獄門死^{等しいた}ル^{等しいた}余リ得ハ鋸

引^{等しいた}怪我^{等しいた}不^{等しいた}て殺^{等しいた}ルものハ斬罪怪我^{等しいた}不^{等しいた}て疵付^{等しいた}ルハ、徒老年半

鞭^{三十}引^{三十}怪我^{三十}不^{三十}て殺^{三十}ルものハ斬罪怪我^{三十}不^{三十}て疵付^{三十}ルハ、徒老年半

82 一主人下人を打擲^{等しいた}ルもの輕き疵ハ御沙汰ニ不及折揚^傷リ

已上之疵ハ平人打擲^{等しいた}四等^{等しいた}減可申事死^{等しいた}不至^{等しいた}リハハ鞭十

八怪我^{等しいた}」不^{等しいた}て殺^{等しいた}ルハハ御沙汰ニ不及事

三九 妻妾夫^{等しいた}打擲^{等しいた}致^{等しいた}ル者

83 一妻夫^{等しいた}打擲^{等しいた}致^{等しいた}ル者鞭十五折傷已上之疵モ平人^{等しいた}方三等

を可加支^{等しいた}一目^{等しいた}潰^{等しいた}シ^{等しいた}ル已上ハ斬罪死^{等しいた}不^{等しいた}致^{等しいた}ルハハ磔

84 一若妾ハ夫并妻^{等しいた}打擲^{等しいた}致^{等しいた}ルハハ又^{等しいた}等^{等しいた}加^{等しいた}ヘ可申事死^{等しいた}ニ^{二三才}

至^{等しいた}リハハ磔^{等しいた}尤^{等しいた}加^{等しいた}るをハ加^{等しいた}て死^{等しいた}不^{等しいた}入^{等しいた}ル事

85 一夫妻を打擲^{等しいた}致^{等しいた}ルもの折傷已上ニ非^{等しいた}さ^{等しいた}ハ御沙汰ニ不及

事右已上ハ平人之律^{等しいた}不^{等しいた}二等^{等しいた}減可申事死^{等しいた}不至^{等しいた}ルハハ斬罪

妾^{等しいた}打擲^{等しいた}致^{等しいた}シ折傷已上ニ至^{等しいた}ルハハ又^{等しいた}式^{等しいた}等^{等しいた}減可申事死^{等しいた}不

至^{等しいた}ルハハ鞭三十

86 一妻の妾を打擲^{等しいた}致^{等しいた}ル者夫の妻^{等しいた}打擲^{等しいた}致^{等しいた}ルと同様之事怪

我^{等しいた}ニ而^{等しいた}殺^{等しいた}ルハハ其證據分明^{等しいた}不^{等しいた}於^{等しいた}テハ御沙汰ニ不及事

四〇 兄弟之打擲

87 一弟妹として兄姉を打擲^{等しいた}致^{等しいた}ルもの鞭式十七疵付^{等しいた}ルハハ鞭三十

折傷ハ徒一年半鞭三十刃傷并手足を折一目^{等しいた}潰^{等しいた}シ^{等しいた}ルハ

上^{等しいた}斬罪死^{等しいた}不至^{等しいた}ルハハ獄門伯叔父姑を打擲^{等しいた}致^{等しいた}ルもの同様

の事怪我^{等しいた}ニ而^{等しいた}殺^{等しいた}シ或ハ疵付^{等しいた}ル者本殺傷之罪^{等しいた}不^{等しいた}二等^{等しいた}を^{二三才}

減可申事尤^{等しいた}贖^{等しいた}ニ^{等しいた}難^{等しいた}相成^{等しいた}ル

89 一子孫として祖父母父母を打擲^{等しいた}致^{等しいた}ル者并妻として舅姑

を打擲^{等しいた}致^{等しいた}ルもの獄門死^{等しいた}ニ至^{等しいた}リハハ鋸引怪我^{等しいた}ニ而^{等しいた}殺^{等しいた}ルハハ

斬罪

88 一兄姉の身として弟妹を打擲ニ而殺し伯叔父姑之甥姪を

打擲^レて殺^ルる鞭三十怪我ニ而殺^ルる證據分明^ル於てハ御

沙」汰ニ不及事

90 一祖父母父母の子孫^ヲ打擲^レて殺^ルハ、依り因て死^ス至^ルハ

ハ御沙」汰ニ不及怪我ニ而殺^ルハ、是又同様之事

四一 師匠を打擲^ルるしゆもの

91 一師匠を打擲^ルるしゆもの平人ニ式等^ヲ加可申殺^ルハハ磔

四二 父祖人^ヲ打擲^サられて其子孫返し打^ルるもの

92 一祖父母父母者人の為^テ打擲^サられ其子孫救^ル為返し打^ル

もの輕き疵ハ不及御沙汰打擲^レ已上ニ至^ルハハ平人打擲^ル

三等」を滅可申事死ニ至^ルハハ定法之如可為解死人事

盜賊

四三 竊盜

93 一盜致^ルもの入墨之上盜取高^ク不應^シ輕重之罪科可行事

故有^テ入墨 定
を不加

一十貫文已下

入墨

鞭三

一十貫文已上

一廿貫文已上

同九

一四拾貫文已上

同十五

一六十貫文已上

同式十一

一八拾貫文已上

同廿七

一百貫文已上

徒半年鞭三十

一百十貫文已上

徒老年鞭三十

一百式十貫文已上

徒老年半鞭三十

一百三十貫文已上

斬 但從之者ハ死罪一等^{トイフ}許^ル事

右錢高を以罪の輕重を定^ル義盜取^ル品幾人ニ而分^ル

ても分前之高^ク不抱盜取^ル本高^ク以一人每^テ罪を加^ル

事尤徒之者ハ一等^{トイフ}滅可申事但一時ニ數家^ヲ不於て盜取

ハ節其内唯一家之財多起方を以罪を定^ル事米穀^{トイフ}

ハ時の直段を以錢ニ直し品物ハ直打致^サ錢ニ積可申

事

94 一盜^ル不入^ル者財物を取不申^ルハハ鞭三入墨ハ免之但人之土藏

を破^ルリ或ハ盜ニ忍入^ルハ次第ニ依大盜ニ紛^ル無^ク之^レハ財物

ニ不抱入墨」鞭三十

95 一入墨之儀腕江廻し幅三步程^ヲ不入墨可致^ル尤初度ハ右之腕江

彫^ルリ二度目^ヲ左之腕江彫可申^ル三度^ヲ不及^ルハハ多少ニ不依

斬罪

四四 御城中江入盗はるしゆもの
96 一御城中江入盗はるしゆもの獄門

四五 自分預之物竊私曲致ゆ者

97 一御預ケ之物を私曲いふし盗取ゆもの首徒之差別無之盗取ゆ
錢」高ヲ以罪を定ゆ事尤幾人ニても分前之高ニ不抱盗取ゆ
本高」を以一人毎不罪を加ゆ事

定

入墨
一二貫五百文已下 鞭九 一二貫五百文已上 鞭十二

一五貫文已上 同十五 一七貫五百文已上 同十八

一拾貫文已上 同廿一 一拾貳貫五百文已上 同廿四

一拾五貫文已上 同廿七 一拾七貫五百文已上 同卅

一貳拾貫文已上 徒半年鞭三十

一貳拾五貫文已上 同老年鞭三十

一三拾貫文已上 同老年半鞭三十

一四拾貫文以上 死罪之代り徒貳年鞭三十

四六 御藏之財物を盗取ゆ者

98 一御藏之財物を盗取ゆ者并御藏廻之者御藏之財物を私曲致
しゆもの首徒之差別無之盗取ゆ錢高を以罪を定ゆ事尤幾

人にて分ゆ而も分前之高ニ不抱盗取ゆ本高を以一人毎不罪
を加」ゆ事

定

入墨
一五貫文已下 鞭六 一五貫文已上 鞭九

一拾貫文已上 同十二 一拾五貫文已上 同十五

一貳十貫文已上 同十八 一廿五貫文已上 同廿一

一三拾貫文已上 同廿四 一卅五貫文已上 同廿七

一四拾貫文已上 同三拾

一四拾五貫文已上 徒半年鞭三十

一五拾貫文 以上 同老年同三十

一八十貫文 已上 斬 但御藏廻之者私曲致ゆ分ハ
死罪之代り徒二年鞭三十

四七 強盜

99 一追剥強盜之者既不行むゆハハ財物を取不申ゆ共徒老年半鞭

三」十既不財物を取ゆハハ不殘磔

100 一盜入忍入ゆ者其家之人江手向いふし或ハ疵付ゆハハ強盜之
御仕」置ゑる遍くゆ但同類之者竹刀不致者ハ竊盜竊以沙汰

可致事

101 一若竊盜既不財物を捨逃去ゆを其家人追懸ゆニ付因て手向
いふしゆものハ此律竊不用科人手向之律を以刑を加ゆ事

料 四八 白昼人の物竊搶奪の事

102 一白昼人之物竊奪取の者鞭三十若取高多ハ、竊盜之罪を

二等竊加可申事從之ものハ一等可減事

資 103 一難船等之節便ニ乘シ乱妨致の者同様の事

104 一喧嘩等ハ因テ財物を奪取の是又同様の事

105 一巾着切之類ハ搶奪ハ無之竊盜の律竊加刑の事

四九 火附

106 一盜の為テ火氣付の者火刑 但燃立不申ハハ斬罪

107 附^{〔七〕}火氣可附旨張札投文致の者鞭三十徒貳年

五〇 馬盜

108 一馬竊盜賣買致の者斬罪 〔二七ウ〕

五一 盜袖

109 一盜袖取のしもの袖取之多少を以御藏之財物竊盜取の律

を以「刑を加可申事尤入墨ハ許ハ不申

110 一山師と母過木伐取り之もの伐出過木不殘取上伐出之多少

を以「罪を加ハ事前条同様之事

111 御留山ニ而柴薪等竊盜伐の過料一貫文尤伐出之高於

ふくハ節ハ錢ニ差積リ一倍之過料可申付事御留山ニ無之共

御停止木伐荒の者右同様之事

112 一山中伐荒有之料人相知ま不申節ハ伐荒之多少を以山下村過

料可申付事

113 一無極印の財木賣買のしもの者ハ取上之上盜物を致なら

致賣買の律を以刑を加ハ事

〔114 なし〕

〔二八オ〕

五二 流失流木盜揚の者

115 一出水之節流木流失取揚の者見分之上五ヶ一山師ハ相返可

申ハ相隠置の見出ハ節ハ流木多少を以過料差出さハ事

定

〔マ、〕 十本已下 一貫貳百文 一拾本已上 一貫八百文

〔マ、〕 廿本已上 貳貫四百文 一三拾本已上 三貫文

一四拾本已上 三貫六百文 一五拾本已上 四貫貳百文

一六拾本已上 四貫八百文 一七拾本已上 五貫四百文

一八拾本已上 六貫文 一九拾本已上 六貫六百文

一百本已上 七貫貳百文

五三 田畑之穀物を盜取の事

116 一 田畑の穀物を盗取らむもの竊盜ニ準し多少を以罪を定む 〔一八九〕

但入墨同様の事

117 一 柴薪草木石之類人功を以伐取積置けを擅り取らむもの是

又同様の事但入墨免之

五四 一 夜中無故人の家ニ入らむもの

118 一 夜中無故人之家ニ入らむもの鞭三もし其家人即時不殺ゆ者

ハ御構無之若又既不捕置擅り打擲らむし疵付ゆ者平

人打擲らむ式等減し罪不行ゆ事死不至ゆハ鞭三十

五五 一 盗人宿らむしもの

119 一 強盜の宿らむしもの者其身不行ゆとも財物を分取ゆハ磔財

物を取不申ゆハ徒卅年半鞭三十

120 一 竊盜の宿らむしもの者財物を分取ゆハ其身不行共竊盜の

121 律不二等を減し罪不行ゆ事乍存預置ゆ者又一等減ゆ 〔一九〇〕

事但品物之高多クとも鞭十五ニ而許可申事若不存ゆハ

御「構無之品物ハ本人江返可申事

五六 一 勾引

122 一 手段を設け人を勾引ゆ者鞭三十因て人を疵付ゆ者斬罪

五七 一 入墨抜取ゆ者

123 一 盜致し入墨ニ被行ゆ者其後蜜不抜取らむもの鞭三入墨直可申

事

五八 一 謀書謀判らむしもの

124 一 御印并奉行諸役人之判を似き造り諸渡り者等盜取らむもの

獄門未タ財物を不取らむものハ死罪一等減可申事

125 一 似き印形似き手紙或ハ古手形を取持公私之物を取ゆ者竊

盜ニ準し錢の高を以罪科の輕重減可行事但入墨竊盜同

様之事 〔一九ウ〕

126 一 語らむ手段ホ不て取ゆ者是又竊盜同様之事但入墨許之

127 一 物取ニ無之申訳の為有合之印形押ゆ類ハ竊盜ニ準し一等を

減可申事入墨免之

五九 一 役人を似き者

128 一 在々通り役人を似き往來之人馬賄ホ差出さきゆハ鞭三十

六〇 一 似き金銀を造りゆ者

129 一 似き金銀造り并私不錢を鑄ゆもの磔細工人同罪其加談

之者ハ死罪一等減可申事但似き金と乍存通用致らむもの

賄賂

資 六二 枉法賄賂の支

130 一賄賂を受^レ任^ルる事^ニ致^スルもの錢の高^ク以^テ輕重之罪科可^ク
行事尤幾人^ノ受^ル而も惣錢押合^セ其高^ク以^テ罪を定^ム事若^シ
枉^ル事重ク^ハへ八人の罪を輕重致^ス律を以^テ刑を加^フ事
(二〇オ)

定

一五貫^(文脱)已下

鞭六

一五貫文已上

鞭九

一拾貫文已上

同十二

一拾五貫文已上

同十五

一貳拾貫文已上

同十八

一貳拾五貫文已上

同廿一

一卅貫文已上

同廿四

一三拾五貫文已上

同廿七

一四拾貫文已上

同三十

一四拾五貫文已上

徒半年

鞭三十

一五拾貫文已上

同卅年

同三十

一五拾貫文已上

同卅年

同三十

一百貳十貫文已上

死罪之代り 徒貳年鞭三十

(二〇ウ)

六二 不枉法賄賂之事

131 一類を受^レ錢を取^ル者^共枉^ルる事無^ク之者^ハ惣錢高押合半分^ニ

して罪を定^ム事但老人^トり受^ルハ半分^ニ比^シらざる事

定

一十貫文已下

鞭三

一十貫文已上

鞭六

一廿貫文已上

同九

一三拾貫文已上

同十二

一四拾貫文已上

同十五

一五拾貫文已上

同十八

一六拾貫文已上

同廿一

一七拾貫文已上

同廿四

一八十貫文已上

同廿七

一九拾貫文已上

同卅

一百貫文已上

徒半年

鞭三十

一百貳十貫文已上

徒卅年

鞭三十

一百貳十貫文已上 同卅年半同三十 (二一オ)

六三 坐贓之事

132 一差而頼合^ル事も無^ク之通例只財^ヲ受^ル類^ハ坐贓之罪ニ被^ル行事

尤惣錢高半分^ニ致^スル而罪^ヲ定^ム事前条同様の事尤與^ヘル

もの三等^ノ減^ル事

定

一拾貫文已下

戸ノ廿日

一十貫文已上

戸ノ三十日

一廿貫文已上

鞭三

一卅貫文已上

鞭六

一四拾貫文已上

同九

一五拾貫文已上

同十二

一六拾貫文已上

同十五

一七拾貫文已上

同十八

一八拾貫文已上 同廿一 一九拾貫文已上 同廿四

一百貫文已上 同廿七 一百貳拾貫文已上 同卅

六四 賄賂の約諾致いもの 〔二一ウ〕

133 一賄賂の約諾いし財物未手ニ入不申ゆ共事冤枉ゆものハ枉

法ニ準し一等冤滅し罪ニ行む可申事約諾のミナて未タ事

を犯」不申ゆへハ不枉法ニ準し一等冤滅可申事

六五 賄賂を行ひゆ者の事

134 一下の者願事之賄賂を行ゆ而枉ゆ事冤得ゆへハ差出ゆ銭高

を以坐贓之律不當刑を可加事尤枉ゆ事重クハハ、重記

方ニ而沙汰可致事若上るもの強ゆ而無礙差出ゆハ、御

咎無之

六六 茂合取立私曲いしゆ者

135 一茂合銭差出さき私用ニ致ゆもの枉法を以罪ニ行む事音

信ニ用自分遣不申共同様之事

田宅 〔二一オ〕

六七 隠田畑

136 一隠田畑いしゆ者一反歩を五反歩までハ鞭六五反歩を段了

一等冤加可申事但隠田畑御取上隠ゆ反畝一年之年貢
可令出事

137 御檢見之節惡地な登振替見きゆもの右之格不て一等冤滅可

申事尤反畝多共鞭十五ニ而許可申支村役之者存見遁ニ

致」ゆものハ本人同罪之事若不存ゆへハ五反歩已下ハ許之

五反歩已」上ハ右之格不て三等冤滅可申ゆ尤反畝多ても鞭

九ニ而許可申事」

六八 田畑質入

138 一年季を以質入致ゆ田地年季相濟本人を元利返濟請戻ヲ

求ゆとも外事ニ詫して不相返年来押領致ゆ者鞭三年来之小

作米可令返事

六九 田畑之押領 〔二一ウ〕

139 一人人之田畑を事ニ寄押領致ゆもの屋鋪ハ一軒田畑ハ一反歩

を五反」步まで鞭三五反歩毎ニ二等冤加可申事尤田畑多ゆ

とも鞭十八ニ而容」赦可致事但年来之小作米令返事前条同

様之事」

七〇 御取納の遲滞

141 御藏廻之者御藏之米宛内借ひ者米錢の高宛以竊盜ニ準し

罪ニ行可申若掛リ之者ニ非連ハ一等宛減可申事但入墨免之

七一 内借

140 御取納者年々十一月晦日迄皆済可致事若翌正月まで無故

して皆済無之者ハ御取納之高十分ニ割一分滞ひハハ戸メ廿日廿日一分毎ハ一等宛加可申事村役同様の事尤鞭九迄ニ

而許可申事

[142] なし

訴訟

[三〇七]

七二 手越不訴状差出ル者

143 一訴状を差出ル者其向々支配頭江差出可申事手越ニ致奉行

御役人江差出ル共取上申問敷事若願難相立義を強而手越

出ルハ戸メ三十日但願可相立筋を支配頭ニ而取押置或ハ支

配頭ニ而「非道之取扱有之を訴ル類ハ可為格別事

七三 無名之訴状

144 一無名之訴状投文致ル者鞭三訴状の趣取上沙汰致間敷事

七四 不実之事宛致訴状ル者

145 一不実の事宛申出人宛罪不落さんとする者鞭刑不可被行事を

訴ルハ即申出ルもの鞭刑なる遍し追放不可被行事宛訴ル

ハハ可為追放若死罪ニ可相成義を訴ルハ徒老年半鞭三

十

146 一若被訴ル人御沙汰既ニ究^[三〇七]其罪被行ル後不実之事願連ルハ

ハ「罪不被行ルもの」刑ハ一等宛可加死罪ニ被行ルハハ

可解死人事

147 若式ケ条訴ル節輕き事ハ実ニ而重起事ハ偽リ或ハ一衷ホテ

も「輕き事を重ク申出ルもの」鞭數之内実事の分を差引残る

鞭「數を以刑ニ行ハル事

七五 親族相訴ル者

148 一子孫として祖父母父母の事宛訴へ妻として夫并舅姑之事を

訴ルもの鞭三十虚説を搦へ裁許を願ルものハ斬罪

149 一伯叔父姑兄姉之事宛訴ルもの鞭十五訴ル事偽ルハハ平人

ニ罪「三等加可申事但被訴ルもの科人自身申出ル律同様

之事若伯」叔父姑兄姉の非道之義有之不得止事申出ルハ、

可為格別事」

七六 子孫父母教ふ背ゆ者

150 子孫として父母の教ふ違む或ハ養育缺ゆ義有之者ハ鞭十五〔二四オ〕

但「父母之申出ニミり刑を加ゆ事

七七 訴訟之腰押致ゆ者

151 訴訟之腰押致し或ハ人の為ニ訴状を作り人を罪不落さんと

致ゆ」者本人と同罪の事

七八 強訴

152 願難相立義を大勢徒黨致し支配頭の差圖を不用強訴ニ於

てハ其棟梁ハ多しゆもの鞭廿四加談致ゆもの一等減可申事

其余一」通之餘黨ハ吟味之上可致容赦事

運上

七九 隠津出

153 隠津出致ゆもの品物取押鞭十五相對致し取賦りゆ者過料壹

貫貳百文〔二四ウ〕

但米貳百俵已上之隠津出ハ家屋舖家財闕所所拂可致事

154 米留有之節無る刑米隠出之者鞭貳百貫〔二四ウ〕

八〇 隠荷揚

155 旅船隠荷物致ゆ品物取押過料錢差出ゆ事但過料之定戸〔二四ウ〕

數方條例ニ有之

〔八一 なし〕

〔156 なし〕

雜犯

八二 博奕

157 博奕致ゆもの鞭三其場之金錢ハ没取可致事但宿致ゆもの可

為」同罪事尤其場ニ居合ゆもの之外同類有之共一々詮義不

及事」

但輕き宝引よミかるゑ等致ゆもの戸メ三十日

八三 御用支氣頼合致ゆ者

158 御用事氣曲て頼合致ゆもの戸メ廿日頼ゆ者并頼を受ゆもの

同」罪之事若支既不〔二五オ〕放し行ひゆへハ頼を受ゆものハ鞭六頼

ゆ者ハ其」親戚朋友の為ニゆへハ二等減を遍し自分の為ニ

ゆへハ本罪の上」ニ」等氣加ゆ事尤曲ゆ事重くゆへハ人の

罪を輕重致ゆ律を以」刑を加ゆ事は欲為不賄賂を取ゆへハ

料

枉法の律を以刑を加ふ事

八四 人の罪を致軽重のもの

159 一依估贖負を以人の罪を軽重致ゆるもの其増減致ゆる處を以

其分の罪を加ふ事若或ハ全ク隠し全ク偽りゆるハ其本罪を以刑を加ふ事

八五 失火

160 一致失火ゆるもの戸メ廿日類焼有之ゆるハ三十日因て火を焼死致ゆるハ「鞭十五但一家之内誰ニ而も手過致ゆる者江刑を加ふ事若」御宗廟并御城ホへ類焼ニ及ゆるハ徒壹年半鞭三十〔二五ウ〕

八六 野火

162 一山野ニ野火附ゆる者鞭三若本人相知れ不申ゆるハ其領分之村「所過」料為差出ゆる事

八七 御觸不背ゆるもの

163 一御觸ニ背ゆる者事の軽きハ戸メ十五日重きハ三十日

八八 不可為義を致ゆる者

164 一不可為儀を致ゆるもの支の軽きハ戸メ廿日重きハ鞭三

此ケ条之儀元來重科者律ホ正敷ケ条有之ゆる得共輕き事

ニ至事變方端ケ条ニ難述ゆる間右様の義二等ニ分此ケ条を以沙汰可致ゆる事

八九 科人手向之者

〔二六オ〕

165 一科人逃走リ捕手の者江致手向ゆる者本罪之上ニ二等冤可加事尤人ニ疵付折傷ニ至ゆるハ斬罪

九〇 科人出奔

166 一窄破并預之内繩解出奔致ゆるもの本罪ニ二等冤可加事

167 一預り之者不覺ニ而取逃ゆる者預人并番人三十日之内ニ捕ゆる儀申付」若捕兼ゆる節ハ科人の罪ニ三等冤減可申事態と逃しゆるハ科人同前」

九一 科人を隠ゆるもの

168 科有之御僉儀之者冤存隱置或ハ其事冤告知らざ逃ゆる者科人の罪ニ一等冤可減ゆる事

九二 私升秤を造りゆる者

169 一私ニ升秤等冤造り并通用升を増減致奸曲冤致ゆる者〔は〕鞭六

九三 御関所を忍通ゆる者

〔二六ウ〕

170 一御関所忍通ゆる者鞭九山越致ゆる者鞭十二

九四 立帰者

171 一科有之御沙汰之上追放被 仰付ゆる者御構の地江立帰ゆるハ

鞭 三本之如追放可致事

172 一悪事有之他国江出奔いゝし其後立帰り忍居ゆるもの本罪より

一等加をし但本罪軽クゆるハ、御関所忍通り罪ニ一等可加

事一

173 一悪事無之出奔之後立帰ゆる者御関所外へ出不申ゆるハ過代

夫役廿日

九五 馬札紛失

175 一馬札紛失致ゆる者過料一貫文

174 一無札馬賣買ゆるしゆる者鞭三

犯姦

〔二七オ〕

九六 姦淫

176 一姦淫之者ハ鞭九男女可為同罪事夫有之者ハ鞭三十

177 一強姦之者ハ徒老年半鞭三十未成者ハ鞭三十

178 一幼少十二才以下を姦ゆるもの強姦同様之事

179 一妻女姦許ゆる而姦を致さざる者本夫姦夫姦婦何きも同罪

之事右何きも姦所ニ於て見届健成證據有之夫或ハ親族申出ニ寄沙汰可致事外ハ訴ゆる類ハ御取上無之

九七 僧尼犯姦

180 一僧尼犯姦ゆる者平人犯姦之罪ニ一等加へ還俗為致ゆる事相犯ゆる者平人姦淫之罪ニ行ゆる事

九八 〔虫損〕 下人家長之妻女を犯ゆる者

181 一下人主人の妻女姦ゆる者斬罪妾ハ一等加減可申事〔二七ウ〕

九九 相對死

182 一男女申合相果ゆるもの子細無之ゆるハ死骸取捨もし女先ニ殺し男存命ニゆるハ解死人男相果女存命ニゆるハ解死人ニ及三日 肆ゆる上乞食手へ相渡可申事

183 一男女共疵斗ふて存命ニゆるハ是又三日肆之上乞食手へ渡之

184 一主人下人と申合相果ゆる者下人相果主人存命ゆるハ解死人不及乞食手へ相渡可申事主人相果下人存命ニゆるハ獄門

185 一御免場所之外隠遊女抱置渡世致ゆもの鞭三

科人片付之儀區々之沙汰有之ニ付此度御刑法沙汰被

仰付之申出之趣被遊 猶又 御自筆被 [二八オ]

仰出由間致勘弁批判逐 鑿勸善懲惡相成由様沙汰

可有之旨四奉行江能々可被申合由已上

三月

御用人中

御家老

御自筆之写

刑法牒沙汰之通申付由一体刑法之儀兼而一定之上ニ由得共

猶 其時宜ニ寄輕重之沙汰も可有之事ニ由且箇条ニ適當之

罪人有之由共何き茂君臣之義を論し其時々沙汰致

由様依而必しも其箇条ニ不可泥事ニ由

巳三月

寛政九丁巳三月被

仰出之

[二八ウ]

「弘前市立弘前図書館郷土資料書目録」第六卷には、

「(寛政改正) 刑律

K三三二・五一〇

写一冊 美濃 仮和

と記す(三九頁)。

本書は濃藍色の表紙を前後に藍糸で綴じつけ、本文は袋綴二七丁からなる。縦二四・七センチ、横一七・三センチ。表紙の左端の題箋は子持野で縁取り、上端に双行で寛政 改正と記して四周を画した下に、本題の「刑律 全」と墨書している。第一丁表の弘前図書館受入印には「登録二三九二四号」とするが、受入日は記していない。虫損あり、一部に判読できぬ箇所もある。朱筆はみられぬが、一五丁表に一箇所書入れがある。

目次はなく、旧蔵者の印や奥書もない。

表題に見る「寛政改正」は(九)で紹介した「寛政改正御刑法帳」と共通するもので、今のところ、この二冊のみに見られる語句である。いうまでもなく、安永律の改正という認識が背景にある。これまでの「寛政律」なる名称が「安永律」を意識したものか、「文化律」を意識したものかは判然としないのと比較したい。さらに「御刑法帳」と「刑律」はそれぞれ他にも見られ、現段階では「御刑法帳」は当初からの呼称、「刑律」はこれを漢語で表現したものとしておきたい。もともと寛政律

の重要な典拠である明律の編目にみられる「刑律」の語が転用されていることはいうまでもない。

本文中の主要な欠落箇所をあげると、114条・142条・八二―156条のみである。114条は(二)(三)(四)(五)(六)(九)にみえ、京大本と(七)(八)にこれを欠く。しかし元來は、これを欠くもので、のちに追記されたふしがある。(二)は末尾に行を改めて「右は巳年済」と記し、(三)は同じく末尾に行を改めて「右者寛政九巳年建る」とする。(四)は112条の後に、113条の但書が一行入り、ついで冒頭欄外に細字で「巳ノ年済」と記し、つづけて小字で本条を入れ、113条が続く。(五)は113条の本文を欠き、但書が112条に続き、その後段を下げて本条が入り、末尾に「右者巳ノ年済」とする。(六)は110・111条を欠き、113条も本文を欠き但書のみで、これに本条が続き、末尾に「右ハ巳ノ年済」とする。また「伐荒過料定」なる貼紙が加えられている。(九)もまた末尾に「右は巳の年済寛政九年」なる句が付されている。いずれにしても本法典の成立に前後して114条のもとになる定ができ、こゝまた追記・後補されたのではなからうか。

なお農林省『日本林制史資料・弘前藩』（昭和七年）の文化七年三月二十七日条には『寛政律』として、冒頭の寛、一一お

よび五一・五二・五三・七九の153・八〇・八一・八六・八七に加えて「盜袖等取押品ノ片付方」として寛政十二年十月の定を掲載する。その原本は(四)に酷似し、(四)の附の二が末尾に加えられた定と符合する。両者は若干の差異はあるが、非常に近い関係にあるものと見たい。

142条はすでに触れたように、該当部分を失っている(六)を除いて、(二)(五)(九)がこれを欠く。京大本では朱書でこれを補い、「器財之類自分之物を以取替候者、同様之事」とする。(三)では「器材之類ハ自分之物と取替候者同様之事、但、入墨之儀ハ許之」とあるが、(四)では「器財之類自分の物を以取替候者、同様之事」とあり、但書を欠く。(七)(八)は(四)とほぼ同文であり、やはり但書を欠く。したがって(三)の但書は前の141条末尾に本来あったものが移動・混入したと見られる。いずれにしても後補の可能性が大である。なお140・141条の位置は誤って入替えられている。

156条は該当部分を失った(六)(八)を除いて、他にこれを欠く写本はなく、たまたま本書のみが脱落したものであろう。

本稿は一九八九(平成元)年度大阪経済法科大学研究助成金による成果の一部である。

料 註(30) 両者の異同を示しておく。

『日本林制史資料・弘前藩』 (四) 『寛政律』第二本

覚 候期(時カ)者

候部者

御刑法名目。明律刑名

御刑法名目。明律刑名 *

17条 組合五軒より

組合四軒より *

差出し

差出させ

不濟者

不濟者

111条 無之候

無之共

153条 二百文以上

二百以上

所払いたすへき

所払いたしへき

162条 文化「^(虫喰)」年

文化三丙^丁年

附 申上罷有然処

申上罷有候然処

無之候分。其品取押

無之候ハ、其品取押

畢竟

畢竟

厚薄之詮義。無御座

厚薄之詮義。無御座

漆方

漆方 *

取押木ニ御無極印

取押木并無極印

取米極月ニ

取束極月ニ

* 印は、異同箇所が上段のようにも読める。

訂正 (四) 第十一号上段

五行目

例ニ者違ひ

↓例と者違ひ

一六行目

極月ニ至り候へハ。

↓極月ニ至り候其

一七行目

仮令少分

↓假令少分

付6 『要記秘鑑』三十三(三・完)

〔一八〕 御仕置之部

247 御仕置日之覺

六日 九日 十一日 十二日 廿六日 晦日

右之通ナリ、尤右之越^(マ)、御定書ニ有之、年月無之、

248 ^(六八三)天和三年九月五日

一籠舎之者之内、籠屋之内ニ而徒黨同前之儀仕出ルニ付、罪科

申付ル次第、

頭取 外瀬村清兵衛

同 能登ノ武兵衛

同 矢田前村十次郎

同 黒土刑部左衛門家来

同 小左衛門

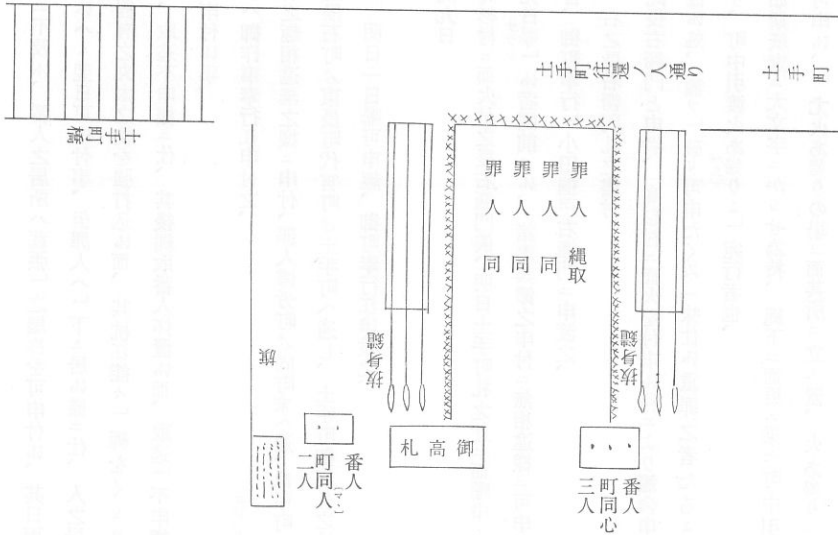
御町中引渡ル節之図

棒を持町同心 三道具人足 拔身鐘 町同心 町同心

旗 三道具人足 拔身鐘 町同心 罪人

棒を持町同心 三道具人足 拔身鐘 町同心 町同心

右四人士手町橋際ニ一日曝、其後町中引渡、磔可申付ル、



町同心 町同心 拔身鎧 町同心 三道具
 罪人 罪人 町同心小頭 拔身鎧 町同心 三道具
 町同心 町同心 「拔身鎧 町同心 三道具
 右之格ニ而ハ、宍人之時ハ中を可致減少少旗之書様、
 此清兵衛武兵衛十次郎小左衛門と申四人之者、重罪之者たる
 ムよりて」筆舎申付ハ処、籠之内ニ而拾五人一味仕、籠を破
 り可申たくみの頭」取仕ハ科ニより、町中引渡、磔ニ宛行も
 の也、」
 此通り大文字ニ紙旗ニ書セ、先ニ為持、其跡ハ段々四人共ニ
 繩下ニ而「馬ニ乗セ町中引渡、其上ニ而磔ニ可申付事、
 〔上 図〕
 一 竹籬地ハ上三尺五寸先ヲきりそぎ、
 一 塀丸太之杭長四尺、
 一 番所長籬ニ枚長上を延ニ而張可申ハ、
 一 番所延考枚たけ右同断、
 一 鎖懸ニ所抜見を三本ツ、立ハ様可仕ハ、
 如斯土手町御高札之脇へ寄ハ而可申付ハ、角屋ニ懸リハ町屋
 ハ」其日戸立セさしわりニ不成方を明させ、自由ニ出入致セ
 ハ而、通り之」人見物仕ハ様ニテ可仕ハ、若郡集之内久敷申
 ハ者ハ通りハ様ニと番」人可申ハ、罪人曝ハニ付上をかこひ

申ニ不及也、番人之居所ハ葎張^ハ之屋祿を可申付也、其日雨降^ルハ、翌日可申付事、但罪人ハ下ニ居^ル様ニ仕、人之居長程有之丸太之杭を強打込^ル而、其杭江能々^ク繩をく^リり付、取逃不申様ニ仕、其後繩取番人^ハ杯置^ル而、取逃^ル不申様可申付^ル事、

右ハ御作事奉行江申付之、

〔五九〇〕

一右之趣相違無之様ニ申付、罪人博勞町^ノ同町末へ通、亀甲町へ廻黑石町^ノ東長町代官町^ノ土手町へ通し、土手町御高札之辻江^ニ明日一日曝可申趣、御町奉行江申渡之、

249 同九日

一高杉村ニ而火付之長右衛門儀、明日土手町札之辻ニ而曝申^ル、先日曝^{サシ}ル者同前ニ^ル、諸事其節之申付ニ無相違様ニ可申付旨、御町奉行^ニ小田桐戸右衛門ニ申渡之、

右之長右衛門札之書付

此長右衛門と申者、高杉村ニ而火を付申^ル科ニより籠舎申付置^ル也、籠ヲ破^リ可申たくみ一味仕^ル重罪之者たるまよ^リ、町中引渡火あ^ルり^ト宛行者也、

如斯紙旗ニ大文字ニか^レせ為持、繩下ニ而馬ニ乗セ町中引渡可申^ル也、尤火あ^ルり^トの場ニ而其所ニ立セ置、火あ^ルり^トニ可

申付事、

一右火あ^ルり^ト申付^ル内、先格之通取上ニ而前後ニ御足懸張番申付^ル、行往留可申付旨、月番之御物頭へ申付之、

250 元禄七年六月廿日

〔六九四〕
一御免之者申渡之儀、御精進日ニ而も不苦^ル事、

一成敗者之儀ハ御精進日無用之事、尤御精進日之前日翌日共ニ三日延引可仕由、御家老中被仰渡^ル事、

〔六九八〕
251 延宝六年七月廿三日

一當春南部常法寺之兵左衛門と申者、於赤根沢赫土水干願就^{〔五九九〕}申立、望之通申付^ル也、赫土奉行小枝傳之丞兵左衛門と心を合セ^ル、赫土賣申科ニより被仰付^ル次第、

小枝善之丞羽カイ付ニ而新知土成田弥兵衛預之也、今日磔場^ニて打首、檢者谷口徳兵衛、打手籠町之者、

一小枝傳三郎儀、親傳之丞罪ニ付成敗、打手御步行、檢者新知土齋藤小左衛門、但預人鳴海清左衛門宿ニ而、

一傳之丞子ま^チ猿千代長藏女房女子老^人、右五人内男子三人^ニ成人之後對、公義江惡事ケ間敷儀不仕様ニ申付、尤近邊之^ニ在郷御通筋ニ差置申間敷^ル由、小館与五左衛門木崎次左

衛門請人」相立書付有別紙、

一石郷岡弥左衛門、此者傳之丞相役ニ得共、曾而様子不存ハ段申合相」立ルニ付、先祇今之通石郷岡弥次右衛門ニ預之、右三人弘前御町申引渡、外濱ニ而礫ニ申付之、

右三人之者共、赫土水干申立ル本人ナリ、

一九郎次郎子仁兵衛同右市右兩人越山申付之、仁兵衛儀ハ知行役ニ罷登ルニ付江戸ノ道中御通筋御国此分拂ル様ニト申越、

一工藤市大夫、土手町左太郎、同町与四兵衛、御法度之赫土もらいルニ付」越山申付之、

一小橋村彦左衛門、南部之兵左衛門所ノ書状之内宿致ル由ル得共、貪議」之上ニ而宿不致段相究、箆舎赦免申付之、

252 ^{〔二六六七〕}寛文七年八月十一日

一今七日於取上、若弱之次左衛門を意趣討仕ル、同国之吉左衛門儀、」不便ニ思召ル得共、御助可被成者ニ無之、付而箆屋

之前ニ而成敗」申付ル、右之段次左衛門親彦兵衛、同国之六郎兵衛ニも申渡ス、

253 ^{〔二六九六〕}元禄九子年九月二日

一斬罪者申付ル日

御公義御精進日御匝月ハ前日朝ノ當日共両日無用可仕ル、御匝」月ニ而無之ハ前日昼之内ニ申付ル分ハ不苦ル、晚寄當日無用之事、

254 ^{〔二七〇〇〕}宝永三年六月廿三日

一襟付と申時ハ、何時も其者之子をころし申御定法之由、何連」覺ヘ可罷在事、

右之趣今日瀧川平右衛門江申付ル事、

255 死罪除日左之通

一享保三戌年十一月八日御老中御列座戸田山城守様被仰渡ル者、御」仕置者申渡日之儀向後御構なくル、然共重キ御祝日御祝月」之御忌日別而之相相除ル様ニト被仰出ル、依之此分可相除哉」之旨、書上ル而相極ル分、左ニ記、

正月九日 同廿三日 四月十六日 同十九日

四月廿八日 ^{〔但大ノ月ハ〕} 五月七日 五月十三日

八月七日 九月七日 十月十三日 十月廿一日

但御精進日ハ勿論可相除ル事、

右うのと申女、獄門被仰付ゆニ付、前々御僉議被仰付ゆ得共、立札」無之、女ニ限り無之事ニ由哉、町奉行ニ而も僉議之処無之段申出ゆ事、」

一以手紙致啓上ゆ、明廿六日御用之儀有之由間、御馬廻追手番一人」鑓持セ五時私宅江相詰ゆ様、可被仰付ゆ以上、

四月廿五日

棟方十左衛門

尚々御馬廻誰罷越ゆ段、御館可被仰聞ゆ、

〔六一〇〕

一明廿六日於取上御仕置場、御仕置之者有之由間、御徒目付、足輕」目付、右之御心得ニ而御申付可有之由、尤町奉行江申合、前々之通」相動ゆ様、御申付可有之由以上、

大目付中

棟方十左衛門

一牢舎之内小泊村喜三郎妹うの、明廿六日於取上御仕置場

御仕置被仰付ゆ間、夫々先格之通、御作法之通可被申付ゆ、

尤御」馬廻檢使罷越ゆ間、各江も申合ゆ様申付ゆ、諸事前々之通」可被申合ゆ以上、

山口瀬兵衛殿

棟方十左衛門

281 寛延三年六月六日

一於取上御仕置場申渡之覚

赤石村高無 角兵衛

右角兵衛儀、當正月十二日之夜、我家江火を付、御藏番人

見當」入牢之上御僉議被仰付ゆ処、庄屋之稻盜取、其上方々盜致」ゆ段、母之庄屋江知セルニ付、村追放申付ゆ処、立帰、母を焼殺可」申と、我家江火を付ゆ段、致白状ゆ、重罪之者ニ付火罪ニ行フ」者也、

檢使御馬廻新岡久右衛門 御目付本多忠左衛門 御徒目

付 足輕」目付 町同心 縄取

但火罪限り御目付出座、

〔六一一〕

右角兵衛取上迄引連參ゆ人数之覚

一先ニ旗立、左右ニ棒持町同心二人

一三道具持人足三人

一拔身鑓持人足三人

一町同心三人

一囚人之左右町同心二人

一牢守宍人囚人ニ付添

一拔身鑓持人足三人

一町同心三人

一三道具持人足三人

一町同心小頭二人

一御徒目付

一足輕目付

料 一 檢使老人

一 御目付

資 右角兵衛火罪ニ申付ゆニ付、前々之通札相立ゆニ付、札案文左之通、

赤石村高無 角兵衛

此もの儀、庄屋方ら稻盜取、其上方々ニ而盜致ゆニ付、母より「庄屋へ知セゆ間、村追放申付ゆ処、立帰、母を燒殺可申と我家江」火を付、重罪之者たるより、火あぶりユ行ふものなり、

〔六二ウ〕

六月六日

右之通相立ゆ札案文認ゆ而、町奉行呼寄相渡、通筋共、

町中引さらし通筋

馬喰町牢前ら 亀甲町 袋町 誓願寺前 江戸町 新町

茂森 一 角仙町 本町通 五丁目 親方町 土手町 富田

町 夫ら富田町 取上御仕置ムラ場 引連參ゆ人数并通筋書

付、半切江認、町奉行江相渡、

一 右角兵衛火罪ニ申付ゆ間、右入用之品々其外共、諸事先格之通夫々「差支無之様、可被申付旨、郡奉行、町奉行江申遣之、一大目付江遣ゆ書付、左之通、

火あぶり

赤石村高無 角兵衛

右角兵衛儀、赤石村庄屋方ら稻盜取、其上方々ニ而致盜ゆニ付、母ら庄屋へ知セゆニ付、村追放申付ゆ処、立帰り、母を燒（ル）路し可申と「我家へ火を付ゆ重罪之者ニ付、弘前町中引渡、於取上火あぶりニ」申付ゆ事、

一 引渡ゆ節并紙旗之儀、別紙ニ有之事、

檢使御馬廻 新岡久右衛門

御目付 本多忠左衛門

御徒 目付

足輕 目付

以上

右之通杉原横折ニ相認ゆ而、大目付へ前晚遣ゆ、町奉行并檢使江〔六三才〕刻限等之儀能々申合相勤ゆ様、御目付へ可申渡由申遣之、

一 明六日於取上御仕置場火罪之者有之ゆ、先格之通、各内

老人可被相越ゆ、尚又書付ハ大目付ら可相渡ゆ、囚人引連參ゆ〔六〕人数并通筋書付〔七〕町奉行江相渡し可被申合ゆ以上、

棟方十左衛門

一 於取上御仕置場申渡之覚

中嶋村無宿 源次郎

同村高無 丹十郎

我共兩人儀、中嶋村佐五右衛門家江火を付ゆ由ニ付、入牢之上御詮」儀被仰付ゆ処、源次郎儀ハ火を付不申ゆ得共、同類之上ハ火付ユ」有之ゆ、丹十郎儀ハ火付共江火を出シ、其上致宿ゆ旨」重罪之者ニ付、兩人共磔ニ申付之、當時ニ行ふ者也ト認之、

檢使 神 吉郎次

御徒目付

足輕目付

町同心

太刀取

繩取

一右兩人磔ニ申付ゆニ付、前々之通札相立ゆ間、案文左之通、

中嶋村宿無 源次郎

同村高無 丹十郎

此者共兩人儀、中嶋村佐五右衛門家へ火を付ゆ由ニ付、入牢之上」御詮議被仰付ゆ処、源次郎儀ハ火ヲ付不申ゆ得共、同類之上ハ火付ニ」^{〔六三ウ〕}有之ゆ、丹十郎儀ハ火付共江火を出シ、其上致宿ゆ得者、」重罪之者ニ付、兩人共行磔ニ者也、

右之通相認ゆ而、町奉行呼寄相渡シ、但半紙堅ニ相認、檢使

江」渡ゆ申渡書付へ、美濃紙横折ニ而上包半紙、

寛延四年六月四日、於御仕置場御仕置并於牢前申渡書付、

向後上半切紙ニ而相認ゆ様被仰付之、

一明六日於取上御仕置場、火罪并磔斬罪之者有之ゆ、右之

御心得ニ而御徒目付足輕目付御申付可有之ゆ、尤町奉行承

合、諸事前々之通相動ゆ様、御申付可有之ゆ以上、

大目付中

棟方十左衛門

一牢舎之内別紙之通四人明六日取上於御仕置場御仕置

被仰付ゆ間、夫々先格御作法之通可被申付ゆ、尤檢使御馬廻

罷」越ゆ間、各江茂申合ゆ様ニ申付ゆ間、諸事差支無之様、

前々之通」可被申付ゆ以上、

町奉行中

棟方十左衛門

一明六日於取上御仕置場御仕置之者四人有之ゆ間、前々之通

番人付置ゆ様可被申付ゆ、町奉行江も可被申合ゆ以上、

郡奉行中

棟方十左衛門

一以手紙致啓上ゆ、御用之儀有之ゆ間、御馬廻追手番式人、明

六日」五時鐘持セ私宅江相詰ゆ様ニ可被仰付ゆ、尤誰相詰ゆ

段御館可被」仰聞ゆ以上、

〔六四オ〕

高倉五兵衛様

棟方十左衛門

一右町奉行江之別紙、左之通、

牢舎之内

赤石村高無 角兵衛

火罪ニ申付之

中嶋村無宿 源次郎

同村高無 丹十郎

此兩人磔ニ申付之

新城村高無 孫 八

斬罪ニ申付之

以上

六月六日

262 ^{〔七五四〕}宝曆四年四月朔日

一今日老役老人江被仰渡ハ公儀御書付之写、左之通、

惣而御答メ被仰付ル者一類共、差扣伺差出ル覺、

御役被召放ル者 父子兄弟祖父孫

閉門逼塞 右 同断

遠慮被仰付ル者 悴

右之通相心得、此外之一類共ハ伺差出ニ不及ル、尤養子杯

ニ相成、續遠ニ成ル類、又者續無之者伺書可差出ル、

一重キ御仕置等被仰付ル節、只今迄之通可被相心得ル、右之通可被違置ル以上、^{〔六四ウ〕}

263 ^{〔七五六〕}宝曆六年十一月廿九日

一御免難被成部

公義江相懸ル部 主殺 親殺 人殺 田畑作毛損害

一御免被成部 上江懸ル部

一御免之御沙汰重キ部 下江懸ル部

一御免之御沙汰新古輕重御正之部 上下ト相懸ル部

右之趣を以來御吟味被仰付之、右書付四奉行江相渡之、

264 ^{〔七五二〕}明和九年二月六日

一川村高無孫作女房さんと申者、夫孫作下帯之下リ江取付、則

死致セルニ付、獄門ニ被仰付之、

265 同年十一月十二日

一四奉行申出ル、御刑法之儀、死刑ヲ追放迄之内、當時ニ被相

行ル刑も」無御座ルニ付、沙汰仕申上ル様被仰付、私共沙汰

仕ル趣、左ニ申上ル、

一五刑之儀ハ通刑ニ御座ル間、和漢共ニ相用來ル得共、墨刑之

儀」御差障り御座は旨被仰付は間、墨刑へ御除被成、右之内江鞭刑」入加へ被仰付は、如何可有御座は哉、左ニ申上は、」

死刑 別刑 宮刑 劓刑 鞭刑 墨刑ノ代リ

右之通被仰付、死刑ヲ追放迄之間ニ相當は科人御座は節、右之」損益仕被仰付は様、可被仰付哉、此段沙汰仕申上は旨、申出之、沙汰之通、」(六五才)以來鞭刑入加御仕置被仰付之、

266 (二七三) 安永二年八月四日

一 御留守居組堀口安兵衛儀、御尋之御用有之、土岐幸八江御預之儀」申渡御用ニ付、評定所江相詰は様被仰付は處、去月廿九日出奔之段」申出はニ付、評定所江相詰は諸役人引取は様、夫々申遣之、」

右出奔之儀ニ付、早速搦捕は様、夫々申遣之、同八月九日宇鉄ニ而」搦取引上入牢之事、但途中ニ而怪我致は儀申出有之、」

同年九月廿五日

一 長谷川茂兵衛申出は、御預之堀口安兵衛妻先月出生之子病死ニ付」片付之儀伺申出之、勝手次第ニ致は様被仰付之、

同年十一月廿六日

一 於牢前御徒目付申渡之覺

堀口安兵衛

我儀、當春小給之面々江流木賣貸被仰付は處、数人之流木手形」謀書謀印ニ而受取、其上出奔致はニ付搦捕引上入牢之上」御貪議被仰付は處、弥謀書謀判ニ而請取賣拂は旨及白状、」言語同断之仕方ニ付、斬罪ニ行ふ者也、

267 (二七五) 安永四年八月廿六日

一去々已年々御調被仰付は御刑罰御定、於江戸表 公邊向御

間」合御吟味重々御沙汰之上、認方出來ニ付、今日高物頭江一帳、」四奉行江一帳相渡之、御用所江も一帳納置は、

尤 上江差上は御帳へ、」御右筆ニ而相認一帳出來、外ニ美濃紙仕立ニ而留書相認壹帳」江戸御用所江相納は節ニ而、先便御飛脚之節、御家老中迄」右二帳差上之、

右 御刑罰御定 別紙左之通

○主殺之者御仕置

一 主人を殺は者男女ニ不限肆者鋸引

肆所等之儀其節沙汰被仰付は尤往來之者勝手次第鋸

引致は様立札致は而日限相濟は迄鋸引仕は者無之はへ、其節引廻之上様

一 乱心ニ而主人を殺は者乱心無紛といへとも逆罪故引廻之上

但酒狂ニ而も同科同罪

資

一人主人を暇出れ而外江奉公罷有本主人を殺害致れ者元主人當主人之差別無之本式之御仕置

但何方も奉公不致常ニ出入主人同前致奉公居れ者同科同罪

一人人ヲ頼連人の主人を殺れ者獄門

一人主人江手疵を得セル者為手負れ迄ニ而不切殺れ得共逆罪

之御仕置ニ相成れ間肆の節鋸引立札ニ不及磔御仕置ニ相成

但乱心酒狂同科同罪

〔六六オ〕

一怪我ニ而主人を殺れ者怪我の證據無紛ニおゐても斬罪

但主人の親又者兄杯有之助命相願れ得ハ重鞭刑追放

被仰付れ事

一怪我ニ而主人為手負れ者準前条

一主殺之者の子共男子十五歳以上ハ重鞭刑追放十五歳

以下ハ鞭刑追放被仰身寄之者江御預被仰付十五歳

ニ相成重鞭刑追放之事

一主殺之者自滅ニ於ハ死體塩漬磔可致事

一主殺之者ニ同類ニハ無之共其者ニ被頼住所ヲ隠シ或ハ立退セ

れ者ハ斬罪

○親殺之者御仕置

一親ヲ殺れ者男女ニ不限肆者鋸引

肆所等之儀其節沙汰被仰付れ尤往來之者勝手次第鋸引致

れ様立札致シれ而日限相濟れ迄鋸引仕れ者無之れハ、其

節」引廻之上磔

一乱心ニ而親ヲ殺れ者乱心無紛といふ共逆罪故引廻之上磔

但酒狂ニ而も同科同罪

一親ハ手疵ヲ得セル者為手負れ迄ニ而不切殺れ共逆罪御仕置

相成れ晒之節鋸引ニ不及立札磔 但乱心酒狂同科同罪

一怪我ニ而親ヲ殺れ者ハ怪我ノ證據無紛ニおゐてハ斬罪

一怪我ニ而親江手疵ヲ得セル者怪我ノ證據ニ依テ親ノ願ニ

任を過ぎ事

一親殺之者ノ子共男子十五歳以上ハ重鞭刑追放十五歳以下

ハ」鞭刑追放被仰付身寄之者江御預被仰付拾五歳ニ相成

重鞭刑追放之事

一親殺之者自滅ニおゐてハ死體塩漬磔可事

一親殺之者同類ニハ無之共其身ニ被頼住所ヲ隠シ或ハ立退セル

者ハ斬罪

○人殺御仕置

一人を殺し者男女ニ不限斬罪

但盜ニ入殺しと申して無之遺恨有之殺しと申儀ニ而下手人

一人ニ被頼人を殺しもの斬罪

一乱心酒狂ニ而人を殺し者斬罪

但前条同様下手人尤右三ヶ条ハ死體不取捨親類身寄之

者又ハ親類身寄之者も無之ハ、町内村所抔死體引取願出

しハ、被下置し事若左様之者無之ハ、是迄之通乞食手ニ

而」片付し様

一高祖父曾祖父祖伯叔父姑を殺しもの肆者磔

〔六七オ〕

肆所等之儀其節沙汰被仰付し右日限相濟於御仕置場磔

一舅姑を殺し者引廻之上磔

一夫を殺し女引廻之上磔

一兄ヲ殺し者引廻之上磔

一弟ヲ無故我假ニ殺し者斬罪

一女房ヲ無故我假ニ殺し者斬罪

一怪我ニ而人を殺し者ハ怪我の證據確ニ於有之ハ被殺し者

親類又ハ寺院等ハ赦免之願於有之ハ用捨時宜御沙汰ノ事

一子ヲ殺し者雖不及解死人時宜御沙汰之事

一十四歳以下之子共喧嘩ニ而相手ノ子共打殺し節十五歳よ

り」以上解死人

但十四歳ヨリ以下ハ出家又ハ相果し子之親之願等も於有之

ハ」時宜御沙汰之事尤人ノ強弱人品ニ寄御沙汰之事

一主殺親殺其外重科之者逃走し者其預り居し者并両親

有之者両親入牢

但科人御詮儀ニ及数月し而も不出しハ、出牢被仰付し事

一在方町方庄屋名主支配方江不相達私ニ差圖致し人殺し者ハ磔

但差圖ヲ受人殺し者ハ重科鞭刑追放又ハ時宜御沙汰之事

一支配所之内人ヲ殺し者ヲ存隠置支配頭へ不申出ハ重鞭刑

〔六七カ〕

ノ」上追放時宜御沙汰之事

一人ヲ殺し者ヲ始末存其者ニ被頼隠置し者ハ家財欠所追放

一人ヲ殺し者ニ被頼立退せし者ハ死罪

但事ノ始末輕重ニ依り時宜御沙汰之事

一其身不埒等ニ而親ノ勘當ヲ得立帰親之家内ノ者抔へ意趣ヲ

舍殺害ノ者ハ獄門

一偽ヲ致シ錢ヲ添實し養子ヲ殺し者獄門

一町方在方ニテ下人ヲ無故殺害ノ者雖不及解死人時宜

御沙汰之事

但追放鞭刑輕重可隨宜時事

一人ヲ殺し者自滅ニおひてハ死骸不及塩漬取捨

一牛馬ヲ牽致往来し不慎ニテ人ヲ蹴殺サセし者ハ解死人ニ不

及重鞭刑追放ノ事

但其仕方ニ寄り解死人ニモ相成へし軽重時宜御沙汰之事

一百姓町人口論之上相手理不尽ノ仕方ニテ不得止事相手ヲ

殺ハ節相手方ノ親類并其所ノ名主庄屋等右被殺ハ者平日

無法ノ者ニテ申分無之ニ付解死人御免之儀願申出於紛ハ

解死人不及追放

〔六八七〕

○火附御仕置

一火ヲ付ハ者男女不限火罪

但乱心酒狂ニテ火ヲ附るといふとも火罪ニ相成附火不燃立

ハ」とも火罪十五歳以下重鞭刑追放被仰渡十五歳マテ親

類江預ケ置右之内大赦等有之願出ハ、時宜ニ寄御沙汰事

一火附之者同類ニハ無之共其者ニ被頼住所ヲ隠シ或ハ立退セ

ハ者ハ家財闕所ノ上鞭刑追放

○牛馬盗入ノ御仕置

一牛馬ヲ盗出他領ヘ賣出又ハ他領ノ悪者引入相對いたし手引ハ

ものハ獄門

一牛馬盗出御領内ニ而モ賣渡ハ者斬罪

一盗馬〔牛馬〕ト乍存買置ハ者ハ其科重キハ斬罪輕キハ鞭刑ノ上

追放家財闕所

一盗牛馬ト乍存買置ハ者ハ證據無紛ハ戸メノ上馬ハ本人江可

相返事

一盗牛馬ノ手引致シ又ハ荷擔致シ口入ハ者ハ斬罪

但其始末巧ノ致方輕ハ鞭刑追放

一牛馬盗入同類ニハ無之共其者ニ被頼住所ヲ隠シ或ハ立退セハ

者ハ」戸メ過料又鞭刑追放

○盜賊之者御仕置

一盗ニ入其家ノ者ニ疵付殺ハ者ハ引廻ノ上獄門

一盗ニ入品物不取共其家ノ者ニ刃物ニテ疵ヲ得セハ者ハ獄門

一盗ニ入刃物ニハ無之共家内ノ者ヘ疵付ハ者ハ斬罪

一土藏ヲ破屋屏ヲ切盜徒致ハ者ハ斬罪

一追剥強盜人を殺ハ者ハ引廻ノ上獄門

一田畑作毛盜取ハ者ハ引廻ノ上斬罪

但其品輕キハ鞭刑追放時宜御沙汰之事

一少分たりとも御藏ヲ破又ハ忍入盜徒致ハ者ハ斬罪

一盗入ノ手引致シ主人ノ家財等盜取セハ者ハ斬罪

一盜賊ト乍存致宿盜物等取扱ハ者鞭刑追放巧ノ重ハ斬罪

一手先ニ有之品ヲ巧ハ事モ無之不圖少分ノ物ヲ盜取ハ類ハ鞭刑

追放

一小盗ニテモ三四度ニ及ハ者ハ斬罪

但無宿者一度二度ノ小盗ハ科ノ輕ハ追放又ハ鞭刑追放時宜

御「沙汰之事」

一 小盜等致輕キ追放ニテモ御搦ノ地江立掃盜徒致ル者ハ斬罪
一 重キ盜賊之者同類ニハ無之ハ共其者ニ被頼住所ヲ隠シ或ハ立
退セ」ル者ハ家財闕所追放

但巧ノ輕重ニ寄死罪又ハ鞭刑

一 盜物買取何品ニテモ致所持罷有ル者ハ取返被盜ル者へ相返セ
可申」盜モノ相調ル者輕重ニ因テ戸メ又ハ追放

但盜物買取代錢相拂盜人遣捨ルハ、買取ル者ノ損分ニ致セ
盜」人ノ雜物ヲ以右買取ル代錢償セ間敷事

一 盜致遍き為人之屋敷ノ内へ忍入ルものハ夜中武士屋敷江忍入
ル得ハ盜得壽ル共死罪町方ニル得ハ鞭刑

但町方ニ而も錠ヲ捻切ル得ハ死罪尤晝夜之差別無之事凡而
少金又ハ少斗ノ品盜取ル而も盜ノ始末ニ寄死罪少々宛ノ品

ニテモ五ヶ所以上盜ニ入ル得ハ引廻之上死罪多分之品ニ
而も戸」メリ之惡所江不斗盜ニ入ル得ハ死罪相遁ル晝ノ盜

ニも錠ヲ捻」切ル得ハ死罪之事

一 橋其外ノ金物等盜取ル者ハ重鞭刑 但輕キハ追放時宜御沙汰
之事」

○博奕致シ候者御仕置

一 博奕ノ宿致ル者中ノ追放

但家財闕所等輕重時宜御沙汰之事

〔六九七〕

一 博奕之上小盜致シル者鞭刑追放

一 博奕之上酒狂等ニ而喧嘩口論町内騒セハ様成不屈之者鞭刑追
放」

一 博奕致ル者中ノ追放

但家財闕所等輕重時宜御沙汰ノ事

○謀書謀判致候御仕置

一 謀書謀判ニ究ル者ハ引廻ノ上獄門

一 物取ニ無之證據ニ可致一通リノ儀杯ニ取辯謀書有合ノ印形押
ル仕形ノ者ハ鞭刑ノ上重キ追放

但物取ノ為右ノ通リノ致方有之者ハ死罪

一 物取ニ無之申訳ノ為斗ニ役所ノ向ノ手形ヲ致謀書有合ノ印形
押ル」類ハ重キ追放

一 同格同士又者町人同士ニ而右鉢之申訳ヲ為斗ニテ役所向ノ手
形等ニハ」無之共謀書等致ル者ハ中ノ追放

右ハ安永四年於江戸表御關役ヲ以 公義御許、裁之筋御問合
之上」以采右之通被仰付

一 謀書ヲ作り親族朋友ノ間ヲ隔又ハ投文等致シ異論ニ及セハ様
成儀致ル者ハ重追放 但巧ノ輕重ニ寄時宜御沙汰ノ事

一 在々通役人ヲ真似馬觸等取持往來ノ人馬賄等出セル者

斬罪

〔七〇七〕

一 質印形古手形等取拵御裁許相願御吟味之上相願ひ者ハ斬罪

一 謀書謀判ヲ以諸渡物等盜取ひ者斬罪

資

一 謀書謀判ヲ相巧人ヲ欺キ致私曲ひ者ハ斬罪

但輕キ事ヲ謀書等致ひ者ハ追放

一 似金銀致ひ者ハ引廻ノ上磔

一 謀書等見遁禮金等取ひ者ハ斬罪

○相對死之者御仕置

一 男女申合相果ひ者子細無之ひ得ハ死骸取捨一方存命ニひ得ハ存命ノ之者ハ解死人

但女相果男存命ニひ得ハ相對死ニひ得共女ヲ男突殺シ其身

仕損「存命ニ得相對死と申儀難立下手人又男相果女存命ニ得ハ」相對死と申立ひ而も相立三日晒ノ上乞食手下相成ひ

一 男女共疵而已ニ而存命ニひハ、乞食手江渡之

一 主人と下人申合相果ひハ、死骸取捨下人相果主人存命ニひハ

、不及「解死人乞食手江渡し主人相果下人存命ニひ得ハ下人

獄門」

○喧嘩致口論ひ者御仕置

一 喧嘩ニ而手相ヲ打殺又ハ切害致ひ者理非ニ不搆解死人

但相手疵ヲ得ひ斗ニ而不死ひハ、疵ヲ得ひ者養生之内疵付

〔七〇七〕 村預又ハ入牢於平愈ハ喧嘩之始末ニ寄時宜御沙汰之

事」尤疵療治之儀ハ疵付ひ者之宿元親類又ハ町内村所ノ可

申付事」

一口論斗ニ而双方手疵等も無之町内騒セヒ類ハ戸メ又ハ町内拂

村拂追放 但酒狂ノ喧嘩右同断

一口論酒狂等ニ而人ノ諸道具損ひ者過料

但右損失ノ者へ取セ可申輕者ニ而過料出兼ひハ、身上限ニ

可申付事」

一手負人ヲ乍存不訴出庄屋名主ハ戸メ五人組ハ過料

一口論之場へ出合於致打擲ハ町内村拂 但家財ハ時ノ御沙汰事

一女房江理不尽之致方ニ而手疵ヲ得セヒ者追放

○立掃者并御関所脇道忍出入之者御仕置

一行跡不宜と申欵又ハ町内村所不和合杯ニて名主庄屋ノ支配方

江」相違町内村所追放之者立掃ひハ、鞭刑ノ上追放

一科有之御沙汰之上追放被仰付ひ者御搆之地江立掃ひ者ハ輕追

放之者立返リ惡事無之ひハ、中ノ追放中ノ追放之者立掃惡事

無之ひハ、鞭刑追放其上立掃少ニ而も惡事有之ひハ、斬罪

但輕追放ニ而も御搆之地江立掃惡事致ひ者ハ斬罪

一 重追放等被仰付ひ者御関所等忍通り又ハ脇道等致シ立掃之者

ハ」獄門

〔七一〇〕

一町在九浦等ニ而屋号も有之相應之身上柄之者借込等致シ出奔

立歸ル者ハ鞭刑追放 但重キハ時宜御沙汰之事

一御家中又者等欠落立歸ル而其主人ヲ御裁許於申出ハ
斬罪

○盜杣之者御仕置

一小屋懸等致泊山御留山ニ而盜杣之者斬罪

一馬附ニ致日歸盜杣ノ者ハ鞭刑追放

一脊負荷日歸盜杣之者ハ追放 但過料鞭刑等時宜御沙汰ノ事

○盜津出之御仕置

一盜津出之者品物取押過料又ハ追放

但鞭刑追放事之輕重科ニ依而時宜御沙汰之事尤過料

出兼ル者ハ家財欠所追放之事

一御停止物隠津出致ル者重ハ死刑輕ハ鞭刑追放

但右兩条ニ準隠荷上御沙汰之事

○隠田畑之者御仕置

一隠田畑致ル者子細御吟味之上隠田畑相決ルハ、死罪

但隠田畑之廣狹又ハ事之輕重ニ因テ時宜御沙汰之事〔七一ウ〕

○公事訴訟強訴御仕置

一一應御裁許相済ル儀非分と乍存取繕再御裁許相願弥非

分ニ落着相決ルハ、追放 但重ハ家財取上鞭刑追放

一支配頭之裁許相背難立儀強訴致ニおいてハ輕重ニ依テ追放

又ハ鞭刑追放

268〔七七五〕
安永四年閏十二月十二日

御用狀書拔

一近年死刑ハ、御煤取以後難成趣ニ御座ルヘハ、 公邊御定落

合右衛門」ヲ以問合ル処、御煤取ハ十三日之由、十二月ハ廿

七日迄正月ハ十三日より」死刑被行ル様申出ル間、右之趣達

尊聽ル処、 公邊ニ而右之通」被行ルハ、 事ニ寄差支ニ

茂可罷成ル間、 此方ニ而も以來右之通相心」得ル様被仰出

ル間、於此地御用人中江も申付ル、 於其御地茂夫々」可被

仰付ル、右之通御家老中御用狀ニ申來之、

269〔七七六〕
安永五年七月十一日

一長峯村高無三太郎、 養父母江疵ヲ得サセ変死致セ、 其身首

溢」相果ルニ付、 塩漬之上居村端於野原被行斬罪ル事、

270〔七七〇〕
安永九庚子年七月牧野備前守様大御目付松平對馬守様江御

同被成ル処、 御附札ニ而御答、 左之通、

一死罪人有之節、 親類服忌續定式之通請可申哉、

〔七二オ〕

料

資

一久離之者死去之節、親類服忌定式之通請可申哉、

御付札、書面之通りハ服忌不及沙汰^レ、併妻不儀有之

殺害ニ及^レ事ニ^レ得^レハ、離縁届之差別ニ拘^レ事ニ而^レハ

無^レ之^レ、^レ且妻家ノ娘ニ而も差別無^レ、

271〔二七七七〕安永六年十月廿九日

一表坊主笹田光鉄儀、相尋^レ儀有^レ之ニ付、慎申付置^レ處、去廿

七日ノ夜、出奔ノ旨申出、^レ僉議申付^レ處、^レ今見當不申、依

之右光鉄人相」書ヲ以御領分中僉議被仰付^レ之、同七年七月廿

六日礫ニ被」行^レ事、

272〔二七八七〕天明二年二月廿二日

一御馬廻清野次五兵衛御尋御用有^レ之、急度慎被仰付、右見繼

中田伊三被仰付^レ處、一昨廿日出奔ノ旨申出^レ之、御徒六人足

輕六人」両目付ノ内三人三手ニ而嚴敷御尋被仰付^レ之、同年八

月三日於」牢前斬罪被仰付^レ之、

但同人悴大助も斬罪被仰付、十五歳迄親類預被仰付^レ之、

273〔二七八四〕天明四年十一月十日

一冬至中、死刑者勿論、都テノ凶事向御用御取調、以來御斟

酌可被成旨、今日被仰出^レ之、

274〔二七九二〕寛政四年十一月九日、冬至中、死刑ハ勿論、都テノ凶事向御

用御」取扱、以來御斟酌可被成由、天明四年十一月被仰出^レ處、又々今日」被仰出^レハ、右冬至中三日^レ前^レ冬至中御刑法

不被行^レ旨、^レ尤凶事向書付差出^レ儀ハ、冬至中ニテモ不苦

旨、以來右之通」相心得^レ儀被仰付旨、多膳主水被申通

レ、^レ

274〔二七八六〕天明六年四月廿六日

一四奉行申出^レ、去十一月死刑之者沙汰仕申上^レ處、當二月ニ

至可被仰付」旨被仰付、然ハ九テ死刑之分春夏ニ被行^レ而ハ

天氣不勝ニモ」相成^レ趣、世俗前々共々申唱^レ而、人氣ニモ

相拘^レ間、以來秋」村納後死刑被相行^レ儀被仰付度旨、去

春御内意申上^レ、如何」可被仰付哉、御内意申上^レ如何被仰

付哉、御内意申上^レ旨申出^レ之、當秋村納後死刑被行^レ儀被仰

付^レ以來と申出^レ得共、^レ其儀ハ不被及御沙汰旨申遣^レ之、

275〔二七九四〕寛政六年閏十一月九日

一是迄輕罪者追放、其上ハ鞭刑追放被仰付^レ得共、以來其所ニ

置^レ而も」妨無^レ之者、鞭刑ニ行^レ而も、居村徘徊、御免被仰

付之、^レ

同七年二月十日、鞭刑被行居村徘徊 御免之者ハ、建札御止被^レ仰付之、

276 ^{〔七九五〕}
寛政七年六月卅日

一四奉行申出^ル、是迄御刑法ニ相用^ル鞭、鯨鱈ニテ長四尺元幅

一寸二三歩^{〔七三〇〕}末幅一寸位ノ平鞭ニ御座^ル処、元来寸法甚大ク

御座^ル而、力一杯ニ打^ル得^ルハ、二三鞭ニテモ皮膚忽破^ル由、勿論二十三十等ノ鞭ニ至^ル得^ルハ必死^{〔七三〇〕}ニモ及^ルヒ程ノ儀

ニ付、取扱ノ者共致加減打^ル趣ニ相聞^ル得^ル、先日^{〔七三〇〕}右鞭私共

見分仕^ル処、実ニ力一杯ニ難打様子ニ相見^ル得^ル、左^{〔七三〇〕}得^ルハ、

打手ノ心次第輕重有^ル之儀、必竟鞭制不宜様ニ奉存^ル間、御

改^{〔七三〇〕}被仰付^ル様、則寸法相考、左ニ申上^ル、

長三尺五寸 元口五分 末口三分一厘

右身原之唐竹ニテ両面ヨリ合セ、中ニ心木榿ノ類ニテ打柄ノ

様ニ矧^{〔七三〇〕}合、寸法之通圓ク削リ、上麻ニテ無村卷、其上漆

塗、握^ル処ハ革ニテ^{〔七三〇〕}卷^ル様、

右之通新規出来、以來相用^ル様被仰付^ル様、尤寸法之儀、古

代鞭制^{〔七三〇〕}ヲ相考、規數ニ相立、割合相定^ル間、委細左ニ申上

ル、

、^レ

唐制 杖 長三尺五寸 大頭徑二分七厘 小頭徑一分七厘

同 答 長三尺五寸 大頭徑二分 小頭徑一分半

同 訊杖 長三尺五寸 大頭徑三分二厘 小頭徑二分二厘

右答ハ小鞭、杖ハ大鞭ニ御座^ル間、十ヨリ五十二テ答ニテ打

申^ル、六十ヨリ百マテハ^{〔七三〇〕}杖ニテ打申^ル、訊杖ト申^ルハ拷問

ノ節用^ル鞭ニ御座^ル而、刑法ニハ用^ル申^ル、

明制 杖 長三尺五寸 大頭徑三分三厘 小頭徑二分二厘

同 答 長三尺五寸 大頭徑二分七厘 小頭徑一分七厘

右ハ明制ニ御座^ル、尤明制ハ唐ノ杖ヲ答ニ相用、唐ノ訊杖ヲ

常行杖ニ^{〔七三〇〕}相用^ル間、一等重相成申^ル、然ハ明答ハ中等ノ鞭

ニ相當申^ル間、是を規數ニ^{〔七三〇〕}相定、寸步割合相定申^ル、

一當時鞭制大杖三鞭、今三鞭行^ル而明答ニテ十鞭行^ル程ニ相當^{〔七三〇〕}

テ^{〔七三〇〕}ニ御座^ル間、今三鞭行^ル而明答ニテ十鞭行^ル程ニ相當^{〔七三〇〕}

程、寸步割合^{〔七三〇〕}鞭ヲ作^ル得^ルハ、大頭徑四步九厘四毛、小頭徑

三步一厘毫毛、長三尺五寸ニ^{〔七三〇〕}相成申^ル間、不尺切上ケ大頭

徑五步小頭徑三步毫厘ニ相定申^ル、尤^{〔七三〇〕}素竹ニテ製^ル而ハ見

分も甚廉末、猶又時々打損可申^ル間、前書之通^{〔七三〇〕}打合セ塗

地ニ致^ル様申出^ル、四奉行沙汰申出^ル之通御改被仰付旨申遣

之、

、^レ

料

277(二七九七)寛政九年五月廿九日

一惣而鞭刑之儀、是迄御用人沙汰書致_レ得共、以來鞭刑之上居
村徘徊_レ被仰付_レ分ハ、沙汰書不及、鞭刑之上村拂追放之者
資
ハ沙汰書致_レ様、「監物江申聞_レ、

278 同年十一月廿六日

一於牢前御徒目付申渡之覚

御中小性
三上 鋭助

其方儀、先年も悪行之儀両三度蒙御咎、町預親類預追放
等も被仰付_レ得共、其後格段之以、御憐愍被召出、御取立
も被仰_レ付_レ間、言行相慎可申処、却而非義ニ募リ狼ニ強
勢を振ヒ悪黨」等ヲ引付、町在の者ヲ劫シ、無筋金錢ヲ掠
取、亦常々世間無_レ輕事隨意放蕩、其上人倫ヲ乱_レ行跡有
之、殊ニ近年在方ニ_レ罷有、那方役人ヲ蔑如シ恣ニ在方ヲ
横行致、不恐_レ上悪行及増長_レ条、言語同断、重科ノ
者ニ付、斯罪ニ行フ者也、(七四〇)

但右鋭助儀御尋之御用有之ニ付、同年三月廿一日於新長
屋_レ慎被仰付之、齋藤小四郎成田源左衛門武田弥学儀見
継被_レ仰付、其外番人数人被仰付之、

279(二八〇八)文化五年六月六日

一御刑法御用懸申出_レ、盗杣并隠田畑隠津出博奕之宿隠商_レ賣
右五ヶ条相犯_レ節、當人御刑法ニ被行、村役町役戸メ被仰
付_レ罷有_レ処、以來町役ハ是迄之通戸メ被仰付_レ、村役ハ戸
メ之代過料_レ上納被仰付_レハ、御メ合ニ相成可申由ニ付、
過料之定、四奉行申出書_レ付被成御渡、此度被仰付罷有_レ、
御刑法調方之節、右之通ニ而可然哉_レ之旨、御演説ヲ以、御
尋被仰付、与得沙汰仕_レ処、四奉行申出之通御_レ定被仰付_レ
様、申出之通、_レ

一右ニ付四奉行沙汰、左之通、

盗杣并隠田畑隠津出博奕之宿隠商賣右五ヶ条之分ハ、當人
御刑法ニ被行_レ節、五軒組合之者共ハ、本人相當之過料上納
被_レ仰、「村役町役之儀ハ不吟味ニ付、五日ツ、戸メ被仰付罷
有_レ、尤右之内_レ隠津出盗杣隠田畑之儀ハ、村役戸メ五日相
限不申、其子細ニ寄、「其時々沙汰仕申上罷有_レ、然ハ此度
被仰付之通、前書五ヶ条之分ハ、「過料上納被仰付_レハ、
格別御メ相立可申、尤町役之儀ハ戸メ之方ハ_レ御メニ相成可
申奉存_レ間、是迄之通被仰付、村役斗過料上納被_レ仰付_レ様、
左_レハ、過料之定、左之通被仰付_レ様、_レ

五日戸メ之代リ 過料錢六百文 (七四ウ)
十日戸メ之代リ 過料錢九百文

十五日戸メ之代リ 同 老貫貳百文

二十日戸メ之代リ 同 老貫五百文

三十日戸メ之代リ 同 老貫八百文

右之通御定被仰付の儀、左のハ、是迄之通村役戸メ被仰付の儀、前書之趣ヲ以、過料上納之儀、其時々可申上旨申出之、沙汰之通被仰付之、

280 ^{〔七八〇〕} 文化七年四月十日

一 町奉行申立の、揚屋入之内、斎藤元右衛門子卯三郎儀、段々
 貪議仕の得とも、申分相分り不申のニ付、拷問責可申付の
 得共、幼若之者ニ付、現責之上、問方可申付と奉存の、右等
 之儀ハ是まで類例無御座旨共、申出之通被仰付之、

281 同年九月十九日

一 四奉行申出の、於取上村御仕置場御仕置者有之節、番人并肆
 日數に相濟取片付方等之儀、古來之処段々致貪議の得共、格
 帳相分兼のハ、問、以來、左之通、

磔 獄門 火罪

右之科人有之、取上於御仕置場御仕置被仰付の節、三日三夜
 肆に置の儀被仰付の儀、尤其度々四奉行の沙汰仕不申上の、

郡所・町奉行に所格帳に記置の儀、御定被仰付の儀、

一 右之科人有之、肆之内、是迄取上村の番人差出來の得共、以
 〔七五才〕
 來に御止被仰付、乞食共二人宛、昼夜番人附置の儀、尤是迄

取上、村番人江被下置の山作人夫代三日ニ而三十目、乞食共
 江被下置の儀、尚又乞食共、肆之日限相濟引取の節、磔獄
 門火罪共、死骸ハ取捨、臺ハ夫々取片付引取の儀被仰付の
 儀、

一 取上村於御仕置場、御仕置之者有之、入用諸色并雪踏人夫
 等、前々取上村の差出來の分ハ、是迄之通差出の儀被
 仰付の儀、左のハ、郡奉行・町奉行ニ而夫々可申付旨、申
 出之通書付ニ而四奉行江申遣の、

282 ^{〔七八一〕} 文化八年十月廿六日

一 秋田院内村出生菊松儀、一昨年五月碓ヶ関町伊三郎居宅江火
 を付の趣、貪議之処、女房之儀ニ付遺恨有之、火を付の旨
 申出之、火罪ニ可行の得共、以御憐愍、於牢前斬罪ニ被
 仰付之、

283 同日

一 大組足輕長谷川辰弥兄徳次郎儀、去十月十日之夜二ノ丸江忍

入、御宝藏「錠前破、金子千両盜取、出奔致ゆ處、江戸表ニ而召捕、御国下、」入牢之上、御衾儀之處、相違無之ニ付、町中引廻之上、於取上御仕置「場、襟ニ被仰付之、

284 同

一今別生仁三郎所々ニ而盜致、召捕、御衾儀之處、秋田出生之者ト偽ルニ付、「錠ヶ関口送返之處、其後一昨年去春迄所々ニ而衣類等盜取、」其上種々悪行致ゆニ付召捕、入牢之上、御衾儀之處、相違無之ニ付、「於取上御仕置場、斬罪ニ被仰付之、」
〔七五ウ〕

285 ^{〔八三三〕}文化十年十二月十日

一三奉行申出ゆ、村方之者戸メ被仰付ゆ而ハ、農事差障ニ相成ゆ間、以來「戸メ相止、過料上納之儀、左之通、

但町續之分ハ戸メ被仰付ゆ様、其事ニ寄過料上納、尤郷土手代」重立ゆ者江ハ戸メ被仰付ゆ様、

戸メ五日過料六百文

戸メ十日過料九百文

同 十五日過料老貫貳百文

同 廿日過料老貫五百文

同 三十日過料老貫八百文

右之通、過料定被仰付之、

286 御仕置者御取扱

文化十年十一月廿五日

一以手紙致啓上ゆ、御用之儀有之ゆ間、御馬廻追手番老人、明廿六日五ツ時鐘持セ、「私宅江相詰ゆ様、可被仰付ゆ、尤誰相動ゆ段、早々可被仰付ゆ以上、」

御馬廻組頭 齋藤小左衛門様

^{〔用入〕}高杉左兵衛

一明廿六日於取上御仕置場、御仕置之者老人有之ゆ間、前々之通、御徒目」付、足輕目付、町奉行届合相動ゆ様、此旨御申付可有之ゆ以上、」

尚々引連人数并通筋之儀ハ、町奉行江申付置ゆ間、申合ゆ様、此旨共」御申付可有之ゆ以上、

大目付中

高杉左兵衛

一明廿六日於御仕置^{〔場脱〕}、御仕置之者老人有之ゆ間、前々之通差支無^{〔六乙〕}之様」可被申付ゆ、尤町奉行可被申合ゆ以上、

郡奉行中

高杉左兵衛

一牢舎之内、後瀧組瀬戸子村多七儀、明廿六日於取上御仕置場、御」仕置被仰付ゆ間、出牢之上、先格御作法之通可被申付ゆ、尤檢使御馬廻」罷越ゆ間、各江申合ゆ様申付ゆ、前々之通差支無之様、番人之儀共」可被申付ゆ、

一右多七建札案文老通差越ゆ間、先格之通可被申付ゆ以上、

町奉行申

高杉左兵衛

右建札案文

一申渡之趣ニ付、文言畧之、尤札板江認囚人江脊負也、

右取上御仕置迄引連込人数之覺

町同心一人 三ツ道具持人足一人 拔身ノ鑓持人足一人

旗 一同断 人足一人 右同断 人足一人

町同心一人 同断 人足一人 右同断 人足一人

町同心一人 町同心一人

町同心一人 罪人 牢守囚人附添老人 太刀取

町同心一人 町同心一人

町同心警固 檢使老人 御徒目付一人 足輕目付一人

町同心警固

右ハ町中引廻通筋并御仕置場迄引連込人数書、前晚手紙添、

町奉行江申遣之、

〔七六ウ〕

町中引廻通筋之覺

一馬喰町牢前 亀甲町 紺屋町 袋町 誓願寺前 江戸町

荒町 茂森町 本町通五丁目 親方町 土手町 富田町 取

上 御仕置場

一於取上御仕置場申渡之覺 後潟組瀬戸子村出生無宿 多七

我儀、去年在浦所々ニ而盜徒致込ニ付、鞭刑ニ被行、追放

被仰付込処、其後」弘前并在々所々ニ而盜徒致込ニ付擲

捕、入牢之上御食議之処、無相違旨」及白状、其上牢屋掃

除之節、柵立飛越逃去、言語同断重罪之者」ニ付、町中引

廻之上、刎首、懸獄門者也、」

檢使 葛西 永助

西十一月廿六日

出座 御徒目付

足輕目付

町同心

太刀取

繩取

右申渡書三枚半切江認之

右御仕置相済込旨、檢使申出之込得ハ、御用番御家老申江左之通、」

以手紙啓上仕、今日於取上御仕置場、御仕置之者老人、

御作法之通り」相済旨、檢使申出之問、則申出別紙書付

差上、此段申上以上、」

津 頼母様

高杉左兵衛

右檢使申出別紙書付、御家老申御下ケニ相成申込、

〔七七ウ〕

〔一九〕 公義御仕置仕形

287

- 一 鋸挽 引廻之者肩ニ刀目ヲ入、竹鋸ニ血付、側立置、二日晒、挽可申ト申者有之時ハ為挽事、
- 一 磔 獄門 浅草・品川・悪事之所、科書拾札建置、三日番人附置同断、自滅ノ牢死、獄門、
- 一 斬罪 浅草 品川之内檢使御徒目付、斬罪同心、
- 一 死罪 死骸様シ申付、但下手人ハ様シ無シ、
- 一 晒 日本橋三日、但新吉原ノ者 所ニテ悪事ハ大門口ニテ晒ス、
- 一 遠嶋 江戸ハ 八丈 三宅 新嶋 大嶋 利嶋 神津 御藏、京大坂ヨリハ 薩摩 五嶋 壹岐 隠岐 天草郡、西国中国
- 一 重追放 関八ヶ国 山城 摂津 駿河 田斐 尾張 紀伊 堺 奈良 長崎 東海道筋 木曾道中 生国 悪事之國、但シ京ハ丹波・近江・河内ヲ入、〔七七ウ〕
- 一 中追放 江戸十里四方 京大坂 甲府 堺 奈良 伏見 長崎 名古屋 若山 水戸 東道 海筋 木曾路 日光道中 生国 悪事之國、
- 一 輕追放 江戸十里四方 京大坂 甲府 東海道 日光道中 生国 悪事之國、

一九八

- 但評定所ニテ追放、御小人目付・町同心、高會召連、常盤橋外ニテ放ス、侍ハ大小・懐中之品渡、
- 一 江戸拂 品川 千住 两国橋 四谷大木戸、右之内拂、
- 一 所拂 隣村町無構、
- 一 門前拂 奉行門ニテ拂、
- 一本罪ヨリ輕重、輕ハ死罪、重ハ重追放、遠島 入墨
- 一二重咎 戸メ過料、敲之上拂、
- 一 奴 望之者江渡シ遣シ、望人無之者牢内江差置、
- 一 追院 寺へ不帰拂、
- 一一宗構 其宗構、一派構、他派ハ無構、
- 一 改易 大小渡シ、屋敷江立帰ル上出ル、家財無構、
- 一 閉門 門ヲ立、通路有間敷、但病氣ハ夜中醫者呼ル事不苦、火事ハ危時ハ立退、支配人江届、〔七八オ〕
- 一 逼塞 門ヲ立、夜中不目様ニ通路、但病氣ハ夜中醫者呼ル事不苦、火事危時ハ立退、支配人届、
- 一 遠慮 門ヲ立、より引寄置、但右同断、
- 一 戸メ 門ヲ貫ヲ以釘メ、
- 一 押込 他出不致、戸を立籠、
- 一 敲 五十、百、牢門前ニテたゞく、牢同心、
- 一 入墨 牢屋敷ニテ申付、墨跡瘡出牢、〔七八カ〕



一手鎖 懸り奉行所ニ而申付、五日改、百日隔日改、〔七八ウ〕
 一過料 三貫 五貫、重キハ拾貫 二十兩 三十兩、
 村高身上相應申付、三日之内納申ル、難出身分ハ手鎖、過料
 申付ル者果、悻無者ハ五人組江申付通シ、
 一田畑取上
 半分取上 一反三貫文 三分二取上 一反五貫文
 三分一取上 一反貳貫文

〔二〇〕 遠慮諸事

288 宝永二年三月廿二日
 〔七〇五〕
 一閉門田浦四郎右衛門、通用人新屋又助申立ルハ、四郎右衛門
 家來一 女房當月産月ニ付自然産も不宜ル者、取上ルハ入申
 度」儀、伺之通、

289 正徳二年九月廿日
〔七二二〕

一柳下忠左衛門儀、先達而無調法之儀有之、遠慮申付置ル処、
 此度」江戸江御登セ被成ル旨、隼人江申渡ルニ付、今晚於月
 番十郎右衛門」宅、忠左衛門江申渡ル者、今度江戸江御登セ
 被成ル、尤遠慮之内」被差登セル間、道中共相慎罷登可申ル
 由、御目付出座ニ而申渡ル、

290 正徳二年三月七日

一成田左次兵衛、遠慮ニ付、病養醫師呼ル儀并出火大風之節
 立除ル事、尤目立不申ル様、風吹トモル節ハ其防致シ、醫
 師呼ル儀勝手次第と、三橋太次右衛門申遣之、

291 享保六年四月九日
〔七三二〕

一御留守居組頭小山内新左衛門申立ル、私支配平井八右衛門儀
 昨」夜中ル大病ニ御座ル、若急ニ差話申ル儀御座ルハ、判
 元」見届之儀可申上哉、遠慮之者故此段奉伺旨申出之、監物
 江」達之、左之通申遣之、

御支配平井八右衛門病氣ニ付御伺之儀、御家老中江申達ル
 処、「遠慮之儀ニ得ルハ、跡式之願ハ難申上筋ニル、依之
 判元見届」之沙汰ニハ及不申ル、万」之事もルハ、実子ニ

料

望_レ得_レハ、右之通「末期之書付ハ不申上_レ此段、一家_ノ申出
此段ハ可然哉、則右御」伺_レ致返進_レ旨申遣_レ之、

同年六月十六日左之通、

資

一平井八右衛門儀久_ク相煩_レ此處、去ル十三日致病死_レ、依之
死骸見分」并片付之儀申出_レニ付、遂詮儀_レ此處、右遠慮之

内致病死_レ者」先例相知_レ不申_レ、依之見分不申付_レ、夜

ニ入、隠便_ニ寺_ヘ差遣」此様申付_レ之、尤妻子ハ只今迄之通

相煩罷有_レ此様申付_レ之、

一右ニ付土門四郎左衛門_ノ差出_レ書付_レハ、江戸江差登_レ、

同年九月廿一日左之通、

一於鷺之間御家老申渡之覚

小山内新左衛門

平井八右衛門跡式、悴亀之丞江御給分無相違被_レ下置、御留

守居支配」被_レ仰付_レ之、

出座 御 目 付

292 享保二十年八月四日物頭高岡祭司、成田半次郎、無調法之

儀御座_レ而「遠慮被_レ仰付_レ内、致病死_レニ付、身上被_レ召上_レ之、

293 寛保四年三月十三日

一三新田代官申立_レ、霧見里村弥太右衛門儀戸_ノ被_レ仰付_レ、只

今田」畑耕作手入最中之時ニ付、差支申_レ間、家内働_レ之者隣

家成」共出入、田畑働仕_レ此様申付度旨、申立_レ之通、

294 寛延二年四月廿四日

一荒田上田源右衛門儀戸_ノ被_レ仰付_レ此處、右源右衛門借屋ニ御扶

持二人」罷成_レ、門口中通御座_レ故、右門口閉_レ而ハ御扶持

人出入差支ニ付、「源右衛門居所斗戸_ノ差置_レ旨申出_レ之、承

届_レ之、

295 明和五年正月廿日

一寺社奉行申立_レ、私共遠慮伺_レニ付、寺社奉行代可被_レ仰付

此哉」之旨申出_レ之、遠慮不被_レ仰付_レ内ハ御奉公差扣_ニ不及相

勤_レ此様、申_レ申付_レ之、

296 明和五年十二月十一日

一鳴海主税申立_レ、兄神源八儀ニ付遠慮伺_レ之通被_レ仰付_レ、私

儀」無足勤ニ付親居宅ニ御座_レ間、門戸閉置_レ儀自分ニ難仕

此間、「此段奉伺旨申出_レ之、門閉置_レニ不及_レ、急度相煩_レ

此様申付旨」申遣_レ之、

297 明和九年七月廿四日

一青森町伊勢屋兼藏、受所山ニ而御停止木伐取_レニ付、過料金

上納被仰付之、

298 安永二年九月六日

一森内左兵衛申立ゆ、叔父古平左次兵衛御役下ニ付、私遠慮伺差出「置申ゆ処、御検見相勤罷有ゆ間、右代奉伺旨申出之、代ニ不及」御検見御用相勤ゆ様、申付旨申遣之、

299 安永三年六月十二日

一留守居組頭竹内源大夫儀、山内弥五兵衛申立ゆ、私共御用取扱「間違之儀ニ付遠慮伺差上置申ゆ、御発駕御當日御目通被罷出ゆ儀延引仕罷出申間敷ゆ哉、奉伺旨申出之、此節」御城代欠役ニ付 御目通不及遠慮旨申遣之、

300 同年八月十一日

一吉村甚五左衛門申立ゆ、実方之兄竹内源大夫御奉公遠慮被仰付「相慎罷有ゆ、然処疴積強大病ニ罷成ゆニ付、人參相用可然」旨醫者申申ゆ、遠慮申恐入奉存ゆ得共、朝鮮人參目形五分御拂願之通、

301 安永六年十一月十三日

一和嶋勘七、小田桐幸之丞、遠慮伺差出置ゆ処、御業屋御用之

節「罷出、御用取扱ゆ様被仰付ゆニ付、式日并御祝儀事之節登城之」儀如何可仕ゆ哉、伺申出之、出仕ゆ様被仰付旨申遣之、

302 安永七年正月十四日

一逼塞松田傳右衛門雪下之儀、通用人ノ伺之通、夜ニ入下ケ様申付之、
同年四月十一日右同人妻病氣ニ付、醫者隣家ノ呼入度儀、通「用人ノ伺之通、

303 安永七年八月朔日

一齋藤安太夫遠慮之処、幼少之子共高聲之儀承届ゆ、隣家參申度政道及兼ゆ儀、難承届旨申遣之、

304 安永八年十二月十五日

一土手町名主申出ゆ、慎被仰付ゆ三宅儀右衛門屋祿、町内ニ而雪下之儀、伺之通、

305 同廿日

一御近習小性申立ゆ、於江戸奥田与八郎去月廿五日夜當番之

料

資

処」出奔ニ付、則晚私共同役小山内孫三郎高倉主斗當番ニ御座^{〔八一才〕}ニ付、御道具痛も心付不申由段、無調法ニ付、急度慎^{〔マ、レ〕}様被仰付」旨申來由、依之爰許家内爰許家内相懐セ置可申由哉、奉伺」旨申出之、留守之者懐之儀伺之通被仰付閉^{〔八二才〕}ニ付不及旨申遣由、

306 安永六年二月十六日

一御用番御用人山野十右衛門病氣ニ付、助御用番津輕多膳相勤」由處、十右衛門儀御奉公遠慮伺之通被仰付由間、御用番引代」次順竹内衛士今日^{〔七八〇〕}ニ相勤之、

307 安永九年正月廿二日

一永野木工左衛門申出由、佐藤多門儀御奉公遠慮伺之通被仰付由處、西隣御役柄ニ付通路之儀伺申出之、目立不申自自分^{〔七八〇〕}ノ用事相弁由様、被仰付旨申遣之、

308 同年三月四日

一四奉行申立由、私共儀比度太田養益儀ニ付遠慮伺由ニ付、御役所」勤并御用取扱御城詰其外^{〔等〕}之節如何可被仰付哉、伺申出之、御沙汰相済由迄、諸事は迄之通申付旨申遣之、

309 同年十月十日

一石岡要助遠慮ニ付、伯父一戸惣助^{〔八一才〕}ノ、代印を以、月割渡方受取」申度旨、伺之通、

310 天明二年二月八日

一御徒釜濱兵七遠慮伺之通被仰付由處、本家登跡借宅ニ付門閉可申哉之旨、御徒頭^{〔八一才〕}ノ内意申出之、門閉不申懐由様、口達ニ而申付之、

311 天明二年二月十八日

一寺社奉行對馬武左衛門遠慮中、屋根漏^{〔八一才〕}由ニ付、繕之儀、申立由通、

312 同日

一閉門樋口弥三郎屋根大風ニ而危相見得由ニ付、火急之儀故、近」所早道菊池文司江相届濟方仕^{〔八一才〕}由旨、通用人^{〔八一才〕}ノ申出之、承届、

同十九日

一右同居居宅、昨日大風ニ而屋根^{〔八一才〕}破損仕^{〔八一才〕}由ニ付、作事方ニ而取繕」被仰付度旨、通用人^{〔八一才〕}ノ伺之通、

313 天明二年三月朔日

一大組武頭沢主馬、組与力之儀ニ付遠慮伺差出置_レ処、幼少之_レ子共虫氣ニ而聲高之儀、親類を以御届申上_レ処、惣而閉門_レ逼塞ハ格別、遠慮一通ニハ以來此御届ニ不及_レ、仍而右書付_レ主馬親類迄相返之、

314 同八日

一御留守居支配清野兵八儀、清野次五兵衛儀ニ付遠慮伺差上置_レニ付、御番之儀如何可仕_レ哉、伺申出之、諸勤引取ニ不及_レ旨申遣之、
〔八二九〕

315 天明元年十一月廿五日
〔二七八〕

一閉門樋口弥三郎居宅又々雪積_レ間、夜ニ入雪下被仰付度旨、通用人_レ申出之、以來度々不及伺、見合雪下致_レ様、尤雪_レ下之度々相濟_レ後申出_レ様、申遣之、

316 天明二年五月朔日

一郡奉行三上理左衛門遠慮之処、子共虫氣ニ而相勝不申_レニ付醫者門出入之儀、同役_レ伺申出之、目立不申_レ様、伺之通申付之、

317 同日

一御手廻間宮金太夫、親一学遠慮伺之通被仰付、私登城并変ホ之節門出入可被仰付哉之旨申出之、伺之通申付之、

318 天明三年十月廿三日
〔二七八三〕

一日記物書豊嶋兼藏、諸手警固對馬仲右衛門方江借宅之所、右仲右衛門昨日慎被仰付_レ、依之私諸勤之節門出入之儀如何_レ可仕哉、伺申出之、目立不申_レ様出入申付之、

319 同年十二月四日

一御用人津輕多膳遠慮中、秋田御買越米之儀ニ付、郡奉行并三橋勤之丞儀御用談ニ付罷越_レ儀、伺之通、

320 天明四年五月十一日
〔二七八四〕

一館山久藏申立_レ、樋口鉄吉遠慮中、續方極難ニ付、月々御手當錢、去十二月_レ不残渡方奉願旨申出之、去當月分三十日渡方申付之、尤来月分_レ月々渡方十五文目ツ、申付旨、申遣之、
〔八二二〕

321 天明四年七月三日

料

一 足立三藏、青森在番ニ付罷下リ御引狀、家來之者取落出奔ニ付罷違不申、遠慮伺差上ルニ付、在番交代罷上リ御儀伺申出之、一 不及遠慮旨申遣之、

資

322 天明五年正月十八日

一 佐木孫兵衛申出ル、同役堀五郎左衛門儀、披露之儀ニ付御奉公遠慮、伺之通被仰付ルニ付、同人預リ御道具も御座ル間、變之節一目立不申ル様、組之者門出入之儀、
一 同人遠慮中、組足輕御用番取扱可被仰付哉、伺申出之、何レも一 伺之通被仰付旨、申遣之、

323 天明六年四月三日

一 山田剛太郎親彦兵衛蟄居之処、病氣ニ付醫者中江對面之上薬用仕セ度儀、願之通、

324 同年九月廿日

一 喜多村平十郎忰与四郎、津輕内膳四男ニ御座ル処、引取不申内、一 内膳方江差置ル処、同人閉門被仰付ル、不苦ルハ、引取被仰付度旨申出之、目立不申ル様引取申付之、

325 同年十月廿九日

一 閉門津輕内膳忰金藏妻病氣ニ付、鍼醫村井玄偏呼入之儀、
通用人ニ伺申出之、伺之通申付旨、申遣之、

326 宝曆九年七月七日

一 御手廻伊東衛門八慎之内、洪水ニ而宅之内ニ水押し、住居難成ルニ付、親類江引取願、并水引ルニ付居宅江引取之儀共、申出之、

327 宝曆十三年二月十五日

一 笠井碓人々、今日五人立御礼罷出ル節、不案内ニ而六人出ルニ付、御奉公遠慮伺申出之、以御用捨御免被仰付之、

328 天明七年十二月廿一日

一 御留守居支配工藤久左衛門、弟仁兵衛入牢被仰付ルニ付、先達而遠慮一 伺差出置ル処、未何レ共御沙汰相濟不申ルニ付、來正月松飭リホ之儀如何可致哉、内意申出、日記役食議之処、相知不申、御家老中江一 相同ル処、松飭ホ致ル而も不苦間敷旨、被申ルニ付、内意ニ而申付之、

329 ^{〔七八九〕}天明九年正月廿二日

一御馬廻對馬友藏、前田長之助、八幡御藏勤中不埒ニ付、遠慮被_レ仰付罷有_レ処、勘定為吟味、勘定人并御徒目付罷越、勘定_レ承_レ様、被_レ仰付之、

330 ^{〔七八九〕}寛政元年九月六日

一木村惣助申出_レ、弟森三之助二男病死仕_レニ付、今晚葬礼仕_レ、_レ同人儀慎被_レ仰付罷在_レニ付、申上旨申出之、^{〔八三〇〕}承_レ届、但天明三年九月廿八日、樋口弥三郎閉門之内、出生之男子病死、_レ夜中密ニ葬_レ儀、伺之通被_レ仰付之、

331 寛政元年七月十一日

一桜庭又三郎申立_レ、叔母算角田惣右衛門方江同居之処、同人遠慮ニ付、門出入之儀奉伺旨申出之、目立不申_レ様申付之

332 寛政元年八月十五日

一作事奉行申出_レ、作事吟味役受拂役申立_レ、渡邊將監屋敷御修復之処、御同人組与力之儀ニ付遠慮被_レ伺_レ由、弥被_レ仰付_レハ、御修復相止、私共引取木柄御道具_レハも御座_レ間、杖突_レ 驚_レ之者昼夜番仕_レ、私共儀も折々見廻仕度、門出入被

仰付度旨_レ伺申出之、目立不申_レ様、門出入申付旨、申遣之、

333 同十五日

一堀五郎左衛門申出_レ、渡邊將監遠慮被_レ仰付_レニ付、御馬廻五番組_レ并与力共取扱、伺申出之、御用番取扱被_レ仰付旨、申遣之、_レ、

334 同日

一木立静馬申立_レ、親惣左衛門遠慮ニ付、平日御馬乘責并登、城之節、居宅_レ出入之儀、伺申出之、御馬乘責平日之通目立不申_レ様出入被_レ仰付旨、申遣之、

335 寛政元年九月十七日

一山野十右衛門申出_レ、藤田庄助儀与力之儀ニ付遠慮ニ付、御^{〔八四七〕}留_レ守居一番組并支配与力共、御用番取扱可被_レ仰付哉之旨、伺_レ之通、

336 寛政元年十月七日

一森山九左衛門申出_レ、弟古川三郎右衛門儀ニ付慎之処、表通り垣_レ 及大破_レニ付、直之儀申出、承_レ届、

337 同十一日

一中田勇藏申立、妹聲岩間喜内慎之処、居宅大破之場

所取締申度儀、申出之通、申付之、

338 同年十二月十五日

一中田八左衛門、對馬定次郎申出、私儀御扶持方御藏勤中、

御家中江内借仕、ニ付、遠慮奉伺置、未被仰付も無之

御座、間、左之通、

一諸勤行罷有、間、來年頭御礼登、城之儀、差扣可申、哉、

一自分拜礼、罷出、儀、延引可仕、哉、

一煤取并餅搗、之儀、延引可仕、哉、

一変之節罷出、儀、如何可仕、哉、

右之通奉伺旨申出、御沙汰之内、是迄之通諸勤相勤

居、様申付旨、夫々申遣、

同年四月十二日、右同様之伺有、尤五節句并御祝儀事、之

節、出仕伺、申出、出仕搦無之旨被仰付、同廿一日、館

山久藏同様申出、

〔八四ウ〕

此ケ条州四ノ部、

339

重キ御仕置		縁類不残遠慮之儀、御沙汰次第、		遠慮日數御定	
火罪	縁類遠慮伺差出、部	妻ノ兄弟	妻ノ甥	伯母聲	姉妹聲
磔	妻ノ叔父	妻ノ祖父	妻ノ祖父	姪聲	孫聲
獄門	父一九日	兄弟子	十二日	叔父	伯父
	分家本家			七代迄	四代迄
	別家準之			親類縁者不残	御用捨
	嫡孫承祖嫡子ニ準			養祖父	三日
				養孫	
				但祖支配不埒有、頭方	

<p>拾里以下追放</p>	<p>斬罪 拾里以上追放 入牢</p>	
<p>父一八日 兄弟子十一日</p>	<p>父一九日 兄弟子十二日</p>	
<p>叔父 六日 兄弟子 六日 分家本家四代迄、 別家準之、</p>	<p>叔父 七日 兄弟子 七日 分家本家四代迄、 別家準之、</p>	
<p>從弟 養祖父 御用捨 兄弟子 四日 孫 嫡孫承祖嫡子ニ準 右之外、親類并縁類不殘 御用捨、 但組支配不埒有之、頭方申立 之上、被仰付の節、御用捨ヲ以不 及、 頭方 直頭 六日</p>	<p>從弟 養祖父 御用捨 兄弟子 五日 孫 嫡孫承祖嫡子準 右之外親類并縁者不殘 御用捨、 但組支配不埒有之、頭方申立 之上被仰付の節ハ御用捨ヲ以、 頭不及遠慮、 頭方 直頭 七日</p>	<p>申立之上、 頭方 直頭 七日</p>

<p>押隠居 御役下 (親御役下ニ付 悴退役 婦役</p>	<p>御役被召放 (知行被召上新ニ 御給分被下置部 閉門 逼塞 蟄居 (変死ニ付 御咎ノ部</p>	<p>永ノ御暇 親不調法ニ而 悴追放、 但里敷ニ不拘、 當人出奔 変死ニテ家断絶、</p>
<p>父一三日 子一五日 但知行之内被召上 押隠居ハ家督之子 十日</p>	<p>父一五日 子一七日 兄弟 七日</p>	<p>父一七日 兄弟 十日</p>
<p>兄弟 三日 (分家本家大叔父 再從兄弟迄 別家準之 直頭 三日</p>	<p>祖父 三日 嫡孫承祖 孫 三日 嫡子ニ準 養祖父 御用捨 養孫</p>	<p>伯叔父 五日 甥 分家 四代迄 別家準之</p>
<p>但組支配不埒有之 頭方申立之上、御役下 御暇ホ之節ハ、御用捨 を以、頭不及遠慮、</p>	<p>叔父 御用捨 直頭 三日 舅 御用捨 番頭 三日 從弟 組支配不埒有之、頭方申立 之上、御役下御暇ホ之節ハ、 御用捨ヲ以、頭不及遠慮、</p>	<p>從弟 養祖父 御用捨 舅 三日 養孫 祖父 嫡孫承祖嫡子ニ準 孫 右之外、親類縁者遠慮伺 不及差出、 但支配不埒有之、頭方申立 之上、御役下御暇ホ之節者、 御用捨ヲ以、頭不及遠慮、 頭方 番頭 五日 (八五ウ)</p>

出奔ニ付遠慮 隠居ノ親出奔并母出奔 家督ノ子一十日 其外ノ子一五日 嫡子出奔 父一五日 (養子ハ實方之 父兄御用捨) 末子 女子 姉 妹 弟 叔父 叔母 } 其家ノ父兄 御用捨	變死ニ付遠慮 父母變死 家督ノ子 一五日 他名ヲ繼ビ子一三日 嫡孫承祖嫡子ニ準 同居之 叔父 叔母 甥 兄弟 妻 } 變死、御沙汰次第、	失火ニ付遠慮 居宅不殘燒失一三十日 輕キ失火 自三日 至十日 (八六才)	御役下被 仰付比當 人遠慮	長袴以上江 長袴以上江 熨斗目以上江 熨斗目以上江 月並以上江 月並以上江 御目見以上江 御目見以上江 十五日	長袴以上江 熨斗目以上江 熨斗目以上江 月並以上江 御目見以上江 月並以上江 二十日	長袴以上江 熨斗目以上江 熨斗目以上江 月並以上江 御目見以上江 御目見以上江 三十日	何役ニ不寄御目見以下江御役下之分ハ 十日	遠慮 親無調法ニ而、遠慮慎之節、嫡子斗、親 御免之節まで 遠慮、 忤無調法ニ而、遠慮慎之節、親遠慮御沙汰次第、	慎 遠慮
				何役ニ不寄御目見以下江御役下之分ハ 十日	遠慮 親無調法ニ而、遠慮慎之節、嫡子斗、親 御免之節まで 遠慮、 忤無調法ニ而、遠慮慎之節、親遠慮御沙汰次第、	慎 遠慮			

料 ^{〔二七九〕}
340 寛政三年四月二日

一棟方左次馬申出_レ、佐藤十郎右衛門儀遠慮伺之通被仰付_レ 処、「妻子病氣ニ付、醫者出入之儀、病人為看病、身近キ親類」共、折々見廻附添セ申度、出入之儀、并御長屋住居裏表」とも端近ニ而、病人取扱方言語洩_レ儀、并幼少之娘虫氣ニ而折々聲高之旨、承届_レ、醫者親類出入之儀、願之通、

341 同年五月廿五日

一田村要七娘小野幾藏妻、先頃_レ病氣、其上幼少之子共取扱方難儀ニ付、幾藏遠慮之内引取養生仕度旨、難申付_レ、

342 同年三年十二月十八日

一御徒小林久太郎_レ、親喜惣司儀、小林辰次郎儀ニ付御奉公遠慮ニ付、當番之節門出入之儀、伺申出、目立不申様出入申付之、

343 寛政二年九月十四日

一棟方十左衛門儀、慎被仰付罷有_レ処、同人叔父山野十助病死ニ付、右「忌中之儀、私方御達申上_レ旨、棟方角之丞申出

之、達之、

但同十九日、右忌中相濟、明日_レ忌明之旨、角之丞申出之、承届、

344 寛政元年正月廿八日

一福田勘兵衛申出_レ、隣家鹿内孫兵衛儀遠慮之処、居宅江雪多懸_レニ付、雪下之儀申出之、目立不申様雪下ケル様、申付之、

345 寛政六年九月廿八日

一工藤弥六郎申出_レ、親類工藤孫市儀御奉公遠慮伺之通被仰付_レ処、同居宅両隣裏合共、明屋敷御座_レ間、何_レ方通路可仕哉之旨、申出之、一躰遠慮之儀ハ目立不申様出入之筈ニ_レ間、右伺書差出_レ儀、心得違ニ付、書付相返シ、

346 寛政十年七月朔日

一清野雅右衛門娘赤石此次郎妻、従先頃病氣ニ而罷有_レ処、此次「郎遠慮ニ付、私方江引取薬用致度、尤此次郎悴當四歳ニ罷成、母方放_レ儀難相成_レニ付、右子共引取之儀、願之通被仰付之、

347寛政十一年六月廿五日

一沢与左衛門申出、津輕多膳儀被仰付罷有、是迄通用口寺」町勤仕長屋之内寺田慶次郎方之通用之処、右長屋取毀、毛」内有右衛門殿木村木工之助屋敷御割入被仰付、家作取付の様子」にて、両家共御役筋之儀御座の間、通用口如何可仕哉之旨」申出之、有右衛門」今引移不申、同人屋敷不目立様」出入致、様被仰付旨申遣之、

348享和三年二月廿九日

一藤田吉太郎儀、弟富藏儀ニ付御奉公遠慮伺差出罷有、^{マカリ}途中ニ而腹痛強、步行成兼、一宿致、只今罷上リ、^{ハセウ}遠慮伺」之通被仰付之、

349文化六年十月九日

一私御長屋組合之内遠慮被仰付、者御座の間、組合之内方御長屋」出入伺差出之、^メ切不申、伺ニ不及、書付相返シ、同居借宅」之者同様之筈、被仰付、

350文化七年二月廿八日

一作業奉行申出、作事吟味役格神要七於三世寺在之用水樋切

組罷有、昨廿七日暮六時頃、居小屋爐方屋祢へ火飛移、小屋」細工所并土場炭小屋焼失、同村藤三郎と申者居宅老軒類」焼、其外人馬怪我無之旨、申出、右懸り合吟味役受拂役共」早速引替リ之儀申付、承届、同卅日、右御吟味役御奉公遠慮伺申出之、格段之御沙汰ヲ以」御免被仰付旨申遣之、

351文化八年十一月三日、遠慮被仰付、節之御取扱、左之通、

一御用之儀有之、間、今晚七ツ時私宅江可被相詰以上、

菊池幸八殿 成田三太夫殿 福真弥兵衛殿

山屋長大夫」

一今晚七ツ時於私宅、申渡之御用有之、各内老人出座可有之以上、

大目付中

山屋長大夫」

一今晚七ツ時於私宅、繰出御用有之、間、各内老人可被相詰以上、

御目付中

山屋長大夫

一於山屋長大夫宅申渡之覚

郡奉行

菊池 幸八

成田三太夫

福真弥兵衛

其方共、在方取扱向ニ不寄何儀も、同役和合熟談致可相勤所、「一己之名聞而已取守、先頃大鰐尾崎大光寺組之者

共、柴「草刈取場所無之、三ツ目内領明山願之節、芦ノ沢

明山之儀ニ付、「村々之者大勢相集、山役人制道相背、却

而及狼藉ニ、御取」扱ニ相成、先年乳井薬師堂兩村山論之

儀、一等乍存、右等之」勘弁も無之緩急之勤方不届ニ付急

度可被仰付得共以「御憐愍、御奉公遠慮被仰付之、

十一月三日

出座 大目付

右申渡相濟所ニ付、御家老衆江左之通、

以手紙啓上仕、今晩於私宅、申渡之御用、只今相濟申

、此段」申上以上、

渡 將監様

山屋長大夫

右御免之節ハ八時過と申遣之、出座御目付、

但頭付之面々ハ、被仰付の節并御免之節共、頭江申遣之、

〔八八ウ〕

寛文化八年十一月九日

慎被仰付の節、御取扱、左之通、

一今晩七ツ時於私宅、申渡之御用有之の間、各内卷人出座可有

之以上、

御用番大目付殿

山屋長大夫

一今晩七ツ時於私宅、申渡之御用有之の間、各内卷人可被相詰

以上、

御用番御目付殿

山屋長大夫

一以手紙啓上、御用之儀有之の間、小館専藏、工藤徳次郎

儀、今晩」七ツ時私宅江相詰様、可被 仰付以上、

御馬廻組頭様

山屋長大夫

一於山屋長大夫宅申渡之覚

御馬廻

小館 専藏

工藤徳次郎

其方共儀、去月廿六日檢使御用被仰付の処、前夜中病氣及

御」断、尤番割之儀ハ三日前通用有之、殊更追手番之儀

ハ、檢使」御用持前之事ニ得ハ、前後之勘弁も可有之

処、病氣と乍申、御取扱ニ相成の儀、不心得之至ニ付、

依之慎被仰付之、

十一月九日

出座 大目付

右相濟所ニ付、御用番御家老江左之通、

以手啓上仕、今晩於私宅、申渡之御用、唯今相濟申、

此段申上以上、

渡 將監様

山屋長大夫

〔八九ウ〕

右御免之節、左之通、

一以手紙致啓上レ、御用之儀有レ之レ間、小館專藏、工藤徳次郎

儀、今晚「八ツ時過私宅江相話ル様、可被 仰付ル以上、

一今晚八ツ時過、於私宅、申渡之御用有レ之レ間、各老人出座可有レ之レ以上、」

御目付中

一於御用番御用人宅、申渡之覚、

小館 專藏

工藤徳次郎

各儀、慎 御免被仰付之、

十二月

出座 御 目 付

353 文化八年十二月十二日

一横嶋宗次郎、奥瀬栄作申出ル、今富五郎、佐藤伴藏、慎中之
処、「居宅屋祢雪下之儀、伺之通、目立不申ル様、雪下申付
之、」

354 ^{〔八二二〕}
文化九年七月二日

一日記役申出、左之通、

遠慮御定ケ条之内、子共並見習被仰付相勤、無調法御座ル而、
勤」料被召上、親江御返シ被仰付、或ハ退役ホ被仰付ル節、

親類頭方遠慮」之儀、右同様共御役被召放之部之御定ニ御座

レ得共、跡式之節、「以上支配ニ可被仰付面々、譬ハ勘定人

并御徒御料理人ホ見習」被仰付、相勤居ル族、右躰御呵之節

ハ、元來跡式之節被仰付ル御」役下席見習相勤居ルニ付、
右之類ハ、親并親類頭方其外御」用捨之部も不殘御座用捨ニ

御座ル御例ニ付、取扱來ル得共、^{〔八九七〕}親子」御目見以上之面々、

忝見習勤ホ不仕ル族ハ、跡式被下置ル節ハ、」

御目見以上御留守居支配ニ被仰付ル御儀と奉存ル、然レ処親並

之分」御役次第下ニ御座ル得共、以上支配ル御徒并勘定人

ホニ御」取立被仰付ル儀も御座ルニ付、家督之節被仰付ル御

役下下席見」習相勤居ル迎、無調法御座ル而、右様被仰付ル御

節、親遠慮御用捨」よてハ如何之御儀ト奉存ル間、以來ハ
親子御目見以上之子共、た」とへ 御目見以下席見習相勤居
レ而も、右躰御呵被仰付ル節ハ、「親并親類頭方共、御定之
通取扱可被仰付哉、又ハ是迄之通之御」形ヲ以、右躰不調法

之節、親御用捨と被仰付、其外之親類ハ不及」遠慮と被仰
付、御用捨之部ハ不及差出ニと可被仰付哉、」

御用所点羽、以來子共之御役儀之高下ニ不抱、父兄共御用
捨之儀」御止被仰付、御役被召放之ケ条ニ而取扱ル様、被
仰付之、

料

資

一末子女子姉妹弟叔父叔母出奔ハ、其家之父兄遠慮三日、或ハ御用「捨」と、御定ニ御座ルニ付、是迄右躰之儀御座ル節ハ、御例御衾議之上、「申上來ル而、遠慮被仰付ル御例申上ル得ハ、遠慮被仰付御用捨之」處、申上ル得ハ御用捨ト可被仰付御儀と奉存ル間、以來ハ、右兩様之内、「一方之御定ニ可被仰付ル哉、但御尋之御用中之族ハ、格別之御座ル、御儀ニ

御用所点羽、以來、其家之父兄、以御用捨不及遠慮旨、被仰付ル、

一頭方ル、不埒有之申立之上、追放以上重キ御阿之節も、頭方遠慮、矢張り御用捨ヲ以、不及遠慮と可被仰付ル哉、又ハ重キ御阿ニ付、三日「遠慮可被仰付哉、但是迄、頭方申立之上、永之御暇并御役下ホ」被仰付ル節ハ、御用捨之部と御定ニ御座ル得共、本文之通、重キ御阿〔九〇才〕之節ハ、何共無御座ル、

御用所点羽、頭方ル不埒之儀申立之上ハ、頭方以御用捨不及遠慮旨被仰付之、

一重キ御阿之節、縁類ニ而遠慮伺差出ル節、遠慮有無是又御例衾議之上、申上來ル得共、早速之御間ニ合不申ル間、以來右躰之節、縁類ニ而遠慮伺差出ル儀、左之通可被仰付哉、

妻兄弟 妻之甥 妻之叔父 妻之祖父 伯母躰 姉妹躰

姪躰 孫躰

御用所点羽、日記役申出之通被仰付ル、

右之通差出ル様、右之外ハ差出ニ不及ル様、可被仰付哉、奉伺旨申出之、「点羽之通被仰付旨、申遣之、

355 文化九年十二月廿二日

一山田十大夫、戸田茂大夫申出ル、門弟教授方怠慢之趣被及御聞、急度可「被仰付ル得共、此度ハ御用捨被仰付ル段被渡之趣、恐入ルニ付、御奉公」遠慮伺之儀、御用捨ヲ以不及遠慮旨被仰付之、

356 同廿五日

一岡文次郎申出ル、親家督御礼御座ル處、申上落仕、奉恐入ルニ付、御奉「公遠慮伺之通、尤右御礼不被為請ル旨共申遣之、

『要記秘鑑』三十三の本文は以上のとおりである。もとより凶事の部は、つぎの三十四に続くので、全体の紹介を終えてから説明すべきであろうが、当面の課題たる弘前藩の刑法典に直接関わる分野は、この三十三が大半であるといえよう。三十三も武士に関するものが多いが、三十四はさらに多くなる。しかし、すべてについて検討するのは、べつの機会に譲ることにしたい。ここでは、とりあえず本書に収められた安永律にのみ触れておく。

267安永四年八月二十六日条は、同日に安永律が完成し、藩内の主要機関に写本が配布されたことを示す貴重な記録であり、さらに新たな安永律の一テキストを提供する。すでに二つのテキストを紹介したが、表記法の違いによる異同はさておいて、主要な違いは、まず三つのテキストの末尾にみられた家老から用人にあてた「覚」を欠くことであるが、これは要記秘鑑の作成にあたり、刑法典の本文以外を省略したにすぎないと見てよからう。それよりも注目したいのは、安永律の八「謀書謀判致し候御仕置」の冒頭、すでに紹介した第70条の前に新たに四条が加えられていることである。これらが新たに付け加えられたことは、この四条の末尾に「右は安永四年於江戸表御開役ヲ以、公儀御裁許之筋御問合之上、以来、右之通被仰付、」とあるこ

とによっても明らかである。ただこの新たな追加部分は先の二テキストには見られなかったことに留意しておきたい。

ところで本書に引用されたテキストを先の二テキストと対校してみよう。たとえば64条の末尾は弘前図書館所蔵本では「戸メ之悪敷。所江不斗盗ニ入候得は、死罪相通候、昼之盗にも錠を捻切入候得は死罪。」とあるが、本書では「戸メリの悪。所江不斗盗ニ入候得ハ死罪相通候、昼ノ盗ニも錠ヲ捻切入候得ハ死罪之事。」と双方に出入りがみられる。そこで青森県立図書館所蔵複写本（仮に「町奉行所本」としておくと「戸メリ之悪敷。所江不斗盗ニ入候得は死罪相通候、昼之盗にも錠を捻切入候得は死罪之事。」とあり、前二者の中間にあることが明白である。本書の基いた母本が町奉行所本に近く、しかも追加四条をふくんだテキストであることが推測できる。

昭和六三年四月から『御用格』は保存のため一般の閲覧が停止されており、本書の作業を進めるにあたり、直接に比較検討をおこなうことが不可能となった。ただ弘前市政一〇〇周年記念事業のなかで『御用格』第一篇の翻刻作業が推進されていると教えられた。その完成を期待し、つぎなる作業を進めたい。

執筆者紹介

本多 淳亮	大阪経済法科大学	教授(労働法)
北島 平一郎	同	教授(外交史)
佐藤 雅美	同	専任講師(刑法)
波多野 雅子	同	助教授(民訴法)
岩村 等	同	助教授(近代法制史)
橋本 久	同	助教授(日本法制史)

(執筆順)

一九八八年度 法学部の記録

(一九八八年四月～一九八九年三月)

(一) 教授会記録

- 。第一回教授会 四月二三日(於 信貴山十三屋)
- 。第二回教授会 五月一八日(於 本学、以下同)
- 。第三回教授会 六月八日
- 。第四回教授会 七月一三日
- 。第五回教授会 一〇月一二日
- 。第六回教授会 十一月九日
- 。第七回教授会 一二月一四日
- 。第八回教授会 一月一八日
- 。第九回教授会 二月一五日
- 。第一〇回教授会 三月一〇日
- 。第一一回教授会 三月一八日(於 大阪グランドホテル)

(二) 人 事

① 新任

左記の教員が一九八八年四月一日付をもって法学部の専任教員として就任した。

本多 淳亮教授 (労働法)

井上 祐司教授 (刑法)

波多野雅子助教授 (民訴法)

鈴木 直哉専任講師 (民法)

② 退職

井上祐司教授は一九八九年三月三十一日付をもって退職された。

③ 昇任

岩村 三 等助教授 (四月一日付)

形野 清貴助教授 (六月一日付)

④ 藤井紀雄教授は任期満了にともない一九八九年三月三十一日付をもって学部長を退任した。

(三) その 他

第三六回法制史学会研究大会が本学で開催された。(一〇月一五日、一六日)